
サルト

岩槻大介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サルト

【Nコード】

N8532F

【作者名】

岩槻大介

【あらすじ】

サルトは一年前に母親を癌で亡くし、現在は父親と二人きりで暮らしている小学6年生。その父親は、仕事もせず毎日ぶらぶらしている典型的なダメ大人だ。元ロックスターだと本人は言うが、その面影は妙に伸ばしたもみあげにしか残っていない。サルトはそんな頼りない父親を軽蔑していた。ある時、ひよんなことから町に新設される高校の校歌をその父親が作ると言い出して…。言いたいことを、ちゃんと言う。一番簡単で一番難しいことを、図らずもサルトはダメ人間丸出しの父親から教えてもらうことに。

校歌のイントロ

ぼくの父ちゃんは、アホである。

人間味のある、とか、もうしょうがないんだからあ的な愛情表現で言っているのではない。

単に学力的なレベルを言っているのだ。

麦畑をどくばたけ、と読み、小野妹子は女だと言い張る。

「島根や鳥取に住んでいるのは、ほとんどが中国人なんだ。だから中国地方って言うんだよ」

そんなことを本気でぼくに熱弁するのだ。

全くぼくの父ちゃんは…。

つーかそれより、あまりにも定番過ぎて恥ずかしいくらい咲き誇っている。

父ちゃんではない。桜だ。

入学式が行われている体育館の中央に並んだパイプ椅子。ぼくはそこに座ってギャラリイの上にある窓の外を見上げた。

あの枝は体育館のすぐ裏手にある雑木林から伸びている。

この学校には、見上げるような桜の大木はまだ一本もない。

雑木林の桜は、長い足を自慢するモデルのように悠然とフェンスを乗り越え、窓の外で風に吹かれている。

ずいぶんと粋なはからいをする侵入者だ。しばらく見ていると、まるで薄ピンク色したたくさんの小人たちに、外からそつとのぞかれているような気になってくる。

「続きまして、校歌斉唱。2・3年生起立」

進行役の教頭先生の声が左右の大型スピーカーから聞こえ、ぼくはハッとわれに返った。

ステージの天井からは『祝・第四回なすな台学園高校入学式』という巨大な横断幕が吊り下がっている。

「お、いよいよ例の…」
「そうそう」

ぼくのまわりにいる新入生たちからそんな会話がもれる。
後ろに陣取った保護者たちも何やらざわつき始める。

その中央で、大げさなテレビカメラが首をゆっくりと振り始める。
さすがに四度目だけあって、今年はずいに地元のケーブルテレビが
腰を上げた。『わが町自慢捜索隊』のコーナーで、この、世にも珍
しい光景を紹介するらしい。

校歌のイントロが響き出す。

なんだか照れくさい。

ぼくの心の奥の方に、熱く、くすぐったい感覚がこみ上げてきた。
ずっと、三年以上前からずっと、ぼくはこの光景を思い描いてい
たんだ。トットン、ジャカジャン、ジャンジャカジャン…。

あつ。

遅かった。ついつい出だしを口ずさんでしまった。

まわりの新入生たちがぼくをいぶかし気な表情で見る。どうして
こいつ、入学したばかりの学校の校歌を唄えるんだ。新入生たちの
目は、異口同音にそう言っている。

ああ、やつちゃった。ぼくは恥ずかしくなり、下を向いた。

床にはバレーだかバスケットだかのコートのラインが、横に赤く伸び
ている。

どうしてこいつ、入学したばかりの学校の校歌を唄えるんだ。

どうしてか。

どうしてか。

どうしてか。

ステージで奏でられる、校歌の生演奏。

その、断じて定番ではないリズム。

今まで定番の日々を繰り返すことしかできなかつた人間にとって、
確かにこのリズムは、とげのように突き刺さる。

逃げ道みたいなイコールをつなげただけの、定番の日々。

空、イコール、青。

野球部、イコール、坊主頭。

満員電車、イコール、おならを我慢する。

校歌、イコール…。

ねえ、それって本当にイコールなのかな。とりあえず誰にも怒られないように、笑われないようにするための、手っ取り早い逃げ道なんじゃない？

ちくり。

そうしてとげはぼくたち、そして保護者たちの心の中にある、あいまいで、疑わしくて、できるなら誰にも見たれたくない腫れ物のようなイコールを、優しく刺すんだ。ちくり、と。

でも、ぼくの保護者は刺されない。

なぜなら、ぼくの唯一の保護者は…。

ぼくの、父ちゃんは…。

不良じじいのカウボーイハット

「父ちゃんはさあ、ぼくが林田家の子になってもいいの？」

ぼくは小学生最後の夏休みの、これまた最後の日に、駅三つ離れたところにあるおじいちゃんのうちへ一人で遊びに行った。

おじいちゃんは近くの川でさわがにの捕まえ方を教えてくれた。

さんざん遊んだあと、駅まで車で送ってもらい、上り電車に乗ってなずな台駅についたのは、夕方六時をまわっていた。

「なんだ、また言われたのか。うちの子になれって」

「そうだよ。おじいちゃんちの子になれば、ゲームも買ってくれるし、毎日おいしいものをおばあちゃんが作ってくれるって」

駅のホームにある公衆電話機には、コインでこすったと思われる LOVE という落書きが刻まれている。

「だって食ってくると思ったんだもん」

「食いたかったよ、本当は。今日だってすごいご馳走だったんだよ。でもぼく、父ちゃんがうちで腹すかせて待っているとって、ちよこつとしか食わなかったんだ」

「食ったんじゃない」

「それを何さ、ひとりで回転寿司なんて」

「え？ なあに、聞こえない」

運悪く、と言うか父ちゃんにとっては運良く、下りのホームに電車が滑り込んで、ぼくたちの通話を邪魔した。

「もういいよ、父ちゃんのアホ！」

プハアアーン。

電車の警笛が鳴ったついでにぼくはそう叫んで、乱暴に受話器を置いた。ピー、ピー、ピー。ちえっ。

テレホンカードを抜いて、ぼくは舌打ちしながら階段へと歩き始めた。

ぼくはこうしてはつきりと言える。「アホ！」と言えるのだ。

相手が父ちゃんだと。

でも…。

ああ、なんだか目に入る全ての後頭部に石をぶつきたい気分になつてきた。

なんだ、あの刈り上げは。みつともない。

なんだよあのもずく頭。どうにかしろよ。

なんだ、なんだ、このカウボーイハットは。いつの時代の人だ。うわっ、つるぴか！

突然の強風だった。ぼくの目の前を歩いていたその老人の頭に乘っていたカウボーイハットが風に飛ばされて宙に舞った。

「あつ」

不意に露出したつるぴか頭を両手で押さえて、老人が振り返る。

帽子はぼくの肩をかすめて、無情にも上り電車の線路内に落下した。

「ああ、なんてことだ」

老人はそう言つて、今度は両手で顔を覆った。

あ、こんなトコで何だけど、ぼくの名前は刻人^{コクト}っていうんだ。

佐藤刻人。

アホな父ちゃんがつけた変な名前。いつでもリズムを刻んでいる人になれ、つてことらしい。

でも友達はみんなぼくのことを「サルト」って呼ぶ。

気付いたらぼくは、確認していた。サルトというあだ名ではない。線路だ。

上り電車が来る方向、プラットホームから左にずーっと伸びる線路。百メートルくらい見渡せる。先っぽの方が夕日と同化して、オレンジ色に光っている。つまり、電車が来る気配は全くない。

ぼくはホームからひょいっと線路に飛び降りた。そしてカウボーイハットのつばを右手でつかむと、そのままノンステップでホームに飛び上がった。

2秒もかからなかった。

そのくらいの跳躍、ぼくにとってはひざを曲げる必要もない。

「全く刻人の身軽さときたら、サル並みだな」

「ホントだよ。コクトじゃなくて、サルトだよ」

体育の時間、跳び箱でぼくだけが9段を跳んだ時、ケンさんとヒロタがそんなことを言い出して、クラスみんなが笑った。担任の陣内先生まで笑っていた。

ま、そのことに関しては特にうれしくも悲しくもなかった。

それよりも9段を跳んだことで、翌日から少しは女子どものぼくに対するまなざしが変わるのでは、とこっちの方の心配、というか期待が勝手にふくらんだ。

しかし、そんなにうまくいくはずもなく、翌日になってもぼくは相変わらず存在感の薄い、やせっぽちの小学六年生のままだった。

みんなの呼び方がコクトではなく、サルトになったことを除けば、「はい」

ぼくは帽子を老人に差し出した。老人は目を丸くしたまま、呆然とそれを受け取った。

別に超能力で帽子を出現させたわけじゃないんだから、そんなに驚かないですよ。

老人は何か言いたそうな顔をして口をぱふぱふさせていた。

「こらーっ」

言ったのはもちろん老人ではない。

ホームの端っこの方から走ってきた制服姿の駅員は、大声でそう叫びながらぼくの前で止まった。

「こら、はあ、おまえ、はあはあ、見てたぞ見てたぞ」

なんとかそこまで言って、駅員は呼吸を整えた。

「ダメじゃないか、線路内に降りたりしちゃうあ！」

今度は落ち着いた口調で言って、人差し指でぼくの鼻先を指した。それがまた、隣の駅にまで聞こえるほどの大きな声だったので、ホームを歩く何人かの人たちの足が一斉に止まった。

ぼくは、言葉を失った。迫力に負けたのではない。

「スリルだかなんだか知らないけど、お前みたいな遊びをするやつ

がいるから、大事故が発生するんだ！」

え？ 待って。違う…。」

「ちよつと待たんか！」

うわっ、びっくりした。

言ったのはもちろんぼくではない。

「この子はちいとも悪いことなどしとらんぞ。わしの帽子を取ってくれただけだ。それを、犯罪者呼ばわりしおって。何だキミは。ほれ、お前もだまってないで言ってやれ」

いや、急にふられても…。」

「あの、失礼ですが、ご家族の方ですか？」

駅員のさめた口調が老人に向けられる。

「いや、わしは、そうじゃないけど」

「じゃあ下がっていてください。こういうワルガキにはね、びしっと言つとかないと、またやりますからね」

「あんたも分からんやつだな。だから違うんだって。な、お前はただ、帽子を拾ってくれようとしただけだよな」

「…その…ぼくは…」

迫力に負けているのではない。

そんな（絵になる）理由なんかじゃない。

ぼくは、ダメなんだ。

「ほら、言ってやれ。そんな頭ごなしに決め付けるな、って」

老人がぼくをせかす。

分かってるよ。

「ぼ、ぼくは…エへへ…」

でも、いつも、いつだって、ダメなんだ。

「あーん、じれったい。よし分かった。本来なら事務室に行って反省文でも書いてもらうトコだが、ま、今日だけは勘弁してやるっ。いいかボウス、死にたくなかったら二度とこんなバカな遊びするんじゃないぞ」

駅員は、ぼくの頭を手のひらでぐりぐりしながらそう言つと、ッ

ンとあごを立てて階段を登っていった。

あとにはあきらめたような静けさだけが残った。

電車も人もいなくなった細長いプラットホーム。

そのほぼ中央で、老人はぼくの干からびたニヤケ顔を見ていた。

「バカタレが」

老人がぼくに言う。頭のカウボーイハットをぼくはチラッと見た。

「なぜ反論しないのだ」

「…」

「あいつはお前のことをワルガキ呼ばわりしたんだぞ」

あんただってバカ呼ばわりじゃん。

「線路内に侵入するのは確かに違法なのかもしれん。けど、その理由をちゃんと説明したら、あんな一方的な言われ方はしなかったはずだ」

ぼくは無視して階段を登り始めた。

「いいか、お前はいいことをしたんだぞ」

老人はぼくの後を追いながら、まだしきりに話しかけてくる。

「それを、遊びって言われた時、違うって思っただろう」

ぼくは立ち止まった。そしてあごだけでうん、とうなずいた。

「だったら違うって言ってやれよ。自分の意見を主張しろよ」

「そんな、無理だよ」

「無理なことあるか」

「ぼ…ぼくは、しゃべるのが苦手だから、何か言つとみんなクスクス笑ったり、じれったくなつて怒り出したり…いつもそうなんだ」

ふう。そこでぼくは細く息をついた。なんか、一か月分の話す量を一気にしゃべっている感じがしてきた。

「だから、もうぼくのこと…」

「やかましい！」

うわっ。な、なぜいきなり怒鳴る？

「よし。これからはわしがお前のコーチを引き受けよう！」

「コ、コーチ？」

「言いたいことを言えるようにするコーチだ」

ってあんた今、ぼくの言いたいことを言えなくさせたじゃん。

「言いたいことが言えないやつは、確実に不幸な目にあうんだ。だからそうならないようにするために」

老人は内ポケットからボールペンを引き抜いた。そして、こともあろうに掲示板に貼ってある一枚のチラシをびりっとはがし、その裏になにやら書き始めた。

全くなんて不良じじいだ。

「ほれ、これがわしの連絡先だ。不幸な目にあいそうになったら、いつでも連絡して来い。わしが助かるワザを教えてやる」

そこにはずいぶんと達筆な字で、電話番号と名前が書かれていた。

夏目雪彦。

なんて季節感のない名前だ、とぼくは思った。

キャロルとスネークス

やめてほしい。ぼくは真剣にそう思っている。でも父ちゃんは断固としてやめない。

タバコ？ 違う。

お酒？ ううん、そうじゃない。

父ちゃんが絶対にやめようとしないうこと。それは、モミアゲだ。何がうれしくて、いつもあんな変な形に整えているのか。ぼくには全く、理解できない。

「ただいま……」

ノブの部分を両手で持ち上げて、ぼくは玄関ドアを閉めた。そうしないと、ドアの底が床と摺れていやな音を発するのだ。

隅の方がはがれて丸まっている壁紙に、色あせた日本地図が貼つてある。社会の勉強に役立つだろう、そう言つて何年も前に父ちゃんが貼つた。だけど、何も玄関の一番目立つ所に貼らなくても……。

ぼくはその地図の千葉県あたりを見て、今日もため息をついた。誤解しないで。別に千葉県が悪いわけじゃないんだ。ただ、その形がそっくりなんだよ。父ちゃんのいびつで巨大なモミアゲに。

もう、見ているだけでこっちが恥ずかしくなる。何しろほつたの下半分に、房総半島が広がっているのだ。しかも地図で言う先っぽあたり、この、館山って所から3センチいくと、もう鼻の穴だ。

誰が見ても変だと分かることに、父ちゃんはどうして気付かないんだろう。アホだ。真正正銘の、アホだ。

ぼくが再び深いため息をついた時、ガラガラ、と居間の扉が開いた。房総アホ親父は、帰宅したぼくの顔を見るなりこう言った。

「お、空腹コクちゃん、ずいぶんとご立腹のようで」

「満腹父ちゃんはずいぶんと機嫌がいいようで」

「そりゃそうさ、楽天が勝ってるんだもん」

居間のテレビには、ナイター中継が映っている。

「それ、巨人戦だろ」

「俺はこんな試合を見るためにテレビをつけているのではない。各地の途中経過を見るためにつけているのだ」

アホの相手をしてもらわれるだけだ。台所に行って手を洗った。ふと見ると、ガス台の脇にやかんとお茶漬けの袋とインスタント味噌汁が置いてある。息子よ、これでも食いさせ、ということか。

でもぼくは、これがアホ父ちゃんの最高の優しさであることを知っている。

ぼくの母さんは、昨年春に癌で死んだ。さらりと言う。いいんだ。もう散々泣いたから。ぼくも父ちゃんも。

母さんは料理が上手だった。こんな時、母さんならおいしいものをちよこちよこつと作ってくれただろう。

いきなりステレオから大音量で音楽が流れる。

父ちゃんが一番機嫌がいい時に流れるテーマソング『キャロル・ベスト』だ。

キャロルとは日本が誇る伝説のバンドらしい。その伝説を語り始めると、父ちゃんは長い。でも、あー、聞き飽きた。伝説だかなんだか知らないが、ぼくにとっては騒音だ。センチになっている暇もありゃしない。しかもテレビではタカハシヨシノブが豪快な空振りをしている。

「ねえ、どつちかにしなよ」

「何が」

「キャロルか、巨人か」

「楽天だ」

「電気代のことも考えろって言うてるの」

ぼくはやかに水を入れて火にかけた。そして泥だらけのズボンを脱いで洗面所の洗濯籠に放り込んだ。

「それが親に対するものの言い方か」

「親なら親らしく働いたらどうなのさ。母さんの生命保険だっていつかはなくなっちゃうわけだし」

ぼくは言いたいことがちゃんとと言える。父ちゃんが相手だと。

「そんなことお前に言われなくても分かってるよ」

父ちゃんはそう言っただけで子供みたいにくちびるをとがらせた。そしてテレビとステレオの電源を同時に落とし、洗面所のドアを開けた。今週は父ちゃんが洗濯当番なのだ。

「あーあ、お前が生まれる前は父ちゃんも忙しかったのになあ」

またいつもの愚痴が始まった。

どうにかしてよ、キャロルのみなさん。

ぼくは父ちゃんが一度だけテレビに出たのを覚えている。

もう何年も前の話だ。「あの人は今」というような番組。

父ちゃんは画面の中で歌を唄っていた。

ぼくが生まれるはるか昔、『スネークス』というバンドがデビューした。ロックンロールとかいう、なんだかうるさいだけってカンジの音楽を演奏していたようだ。

最初はキャロル2世などとささやかれるも、実際には全くヒットせず、レコードを一枚出しただけで解散したらしい。

そのバンドでボーカル・ギターを担当していたのが佐藤大介。

つまりぼくの父ちゃんだ。

バンド解散後、ベースの人だけが違うプロダクションに拾われて、歌謡曲専門のアレンジャーとなった。それ以外のメンバーは、父ちゃんを含めて全員、音楽業界からポイと捨てられたらしい。

父ちゃんはそれから実に九回、仕事が変わった。

アホなくせにすぐ上司に逆らって、大口たたいて、クビ。母さんが言うにはそのワンパターンだったらしい。

母さんはぼくのことをとても厳しく育てた。

それに対して父ちゃんは全く厳しいことを言わなかった。

つーか育ててもいなかった。

だから母さんはよく、一度に二人を厳しくしかりつけた。

「早く学校に行きなさい！」

「早く仕事に行きなさい！」

そんな情けない父ちゃんが、一度だけぼくを真剣にひっぱたいたことがある。でもその怒った理由が、ぼくにはいまだに分からない。ぼくはただ、勤めていた会社をクビになったばかりの父ちゃんにこう言っただけだった。

「父ちゃんも歌謡曲やらしてって頼んでみたら？」

そう。それは子供なりに考えた一つの提案だった。でも父ちゃんは顔を真っ赤にしてこう言いながらぼくの頭をパーで叩いた。

「俺を何だと思っている。ロッキンローラーだぞ」

痛さと、あまりの不合理さを訴えるために、ぼくは近くにいた母さんの腰に抱きついた。

でも、母さんはぼくの両手を振りほどき、しゃがんでぼくの目をまっすぐ見ながらこう言った。

「父ちゃんの言う通りよ、刻人」

結局母さんは何の通りなのかを教えてもくれずに逝ってしまった。それ以来父ちゃんは、働きに出ていない。

なんだよ、母さん。ロッキンロールって、そんなに偉いのかよ。

母さんが死んでから、母さんの両親、つまり林田家のおじいちゃんとおばあちゃんは、ちよくちよくうちに来るようになった。

昼間はぼくをデパートや遊園地に連れて行き、夜は父ちゃんと遅くまで何かを話し合っていた。その時の「早く寝ろ！」とぼくに言う父ちゃんの顔は、なぜだか分からないけど、いつもむちゃくちゃカッコよかった。

ぴーっ。お湯が沸いた音でぼくはわれに返った。

台所でパンツ一丁のままお茶漬けを食べていると、父ちゃんが四つ折にたたんだ紙片を持って洗面所から出てきた。

「コクト、お前確か来年中学だよな」

「自分の子供の歳くらい覚えといてよ」

「いや、お前のズボンのポケットから高校のチラシが出てきたから」
チラシ？ あ、あの不良じじいががした…。

「あれえ、何だろうなあ、これ」

「とぼけるなよ」

「あ、あのね父ちゃん、それはがしたの、ぼくじゃなくて…」

「俺のためにお前…。いいトコあるじゃねえか」

「え、ええ？」

「これだろ。でも特別謝礼って、いくら位なんだろうな。公立だと期待できそうにないが、これ、私立だよな。しかも何つつたって特別だ。そりゃ期待しちゃうわなあ」

夏目という不良じじいが駅の掲示板から適当にはがしたチラシ。

それは来年度に開校する『なずな台学園高校』の生徒募集のチラシだった。で、父ちゃんがこれ、と言つて指した箇所には、こんな一文が書いてあった。

なお本校では校歌を一般公募いたします。採用された作品の作者には記念の盾と特別謝礼を贈呈します。

「なんだかんだでお前は、俺の才能を信じてたんだな。よし、父ちゃん頑張ってみるよ」

うわあ、なんて展開だ。

ぼくは廃盤になったスネークスの唯一のCDを保育園のころから何度も聞いている。と言うか父ちゃんに無理やり聞かされている。

それは、学校の校歌とはまさに正反対のジャンルに分類されるべき音楽だった。

無理だよ。父ちゃんに、校歌なんて。

全くあのじじい、よりによつてこんなチラシをはがさなくても…。

そんな心配をよそに、父ちゃんは早速部屋にこもりギターを弾き始めた。考えてみたらすぐく久しぶりだった。父ちゃんのギター。

でも、やっぱり無理だよ。

また挫折して終わりだよ。

つーか、洗濯思いつきり途中じゃん…。

ケンさんに感謝された

二学期が始まった。

母さんが死んでから、ぼくはやたらとニヤニヤするようになった。自分でも分かる。あ、ぼく今ニヤニヤしてる、って。

もちろん自分の顔は見えないが、想像するとわれながら気色悪い。よくある話だが、ぼくら六年一組の教室は一番ケンカの強いケンさんを中心に回っていた。そしてケンさんの興味をひく情報を入手したやつが、その日ごとのナンバー2になることができた。

「ねえ、どうして工事が中断したか知ってる？」

下校途中に、ヒロタは目を輝かせてぼくとケンさんにそう言った。町外れにある巨大マンションの建設工事現場。

確かにあそこは最近、工事をしている気配がない。

「エロタ、知ってるのか。教えるよ。何があつたんだ」

ケンさんが詰め寄る。ヒロタは小さく手招きして、ぼくとケンさんの耳を近づかせる。

「出ちゃつたらしいんだ」

「何が」

「古代遺跡さ」

「古代遺跡？」

「ってことは、教科書に載ってるような古墳とかが発掘されたのか」

「土器とかかも知れない」

「すげーじゃん！」

こうしてヒロタは本日のナンバー2に躍り出た。

ヒロタの家は小さな書店を経営している。

店の入り口付近には普通に雑誌や漫画が並んでいるが、一歩中に入ると、半分以上がビニールに包まれたエッチな本で棚が埋まっている。そんな書店だ。

お前んちの本屋はエロ本専門じゃねえか、ヒロタ書店じゃなくてエロタ書店だ。ケンさんが言い出した。それ以来ヒロタはエロタと呼ばれている。

ヒロタはぼくのことをサルトと呼ぶ。でも、ぼくはどうしてもヒロタのことをエロタと呼べない。うまく言えないけど、サルトとエロタじゃ、決定的な違いがあるような気がするのだ。

いずれにしろ常にアンテナを立てているヒロタは、その分入手する情報量も多く、ナンバー2になる回数もクラスの中ではダントツだった。それに比べてぼくは、いつもニヤニヤしているだけでケンさんの気をひくことも、もちろんナンバー2になることもなかった。「それってきつと、どっかに持ってつたら高く売れるよな」

「そりゃ土器つつつたら、貴重なものだからね」
ヒロタが得意気に解説する。

ケンさんの瞳が弁当箱の中の銀紙みたいに輝く。

「よし、俺たちも発掘しに行くぞ」
最後の行くぞ、という言葉はなぜか、ニヤニヤしているぼくに向けられて発せられた。

構内立ち入り禁止。

まずそんな文字が目に入った。

ぼくらはその巨大な看板が掛けられたフェンス越しに中の様子を見ることができた。

建設機械が数台見えるが、確かに稼働している雰囲気はない。それどころか、敷地内に人らしきものが全く見えない。

「誰もいねえんじゃねえの」

「ホントだ」背の低いヒロタが背伸びをする。

「よし。飛び越えるぞ」

ケンさんの一言に、ぼくとヒロタは唾を飲み込む。

フェンスの高さは2メートル弱。

ぼくらはランドセルを放り投げた。

最初にぼくが飛び越えて、次に二人が乗り越えた。

二人ともぼくの二倍以上の時間を費やした。

そしてぼくらはそーっと歩き、工事現場の中心へと向かった。太陽はもう沈みかけている。静かだ。風もない。風景はまるで絵のようになってしまう見える。

ぼくらは足音を立てずに歩きながら、やがて巨大な穴が掘られた中心部へと足を踏み入れた。とその時、敷地のはずれにあるプレハブ建物のドアが開いて、中から人が出てきた。

「やべっ、見つかった！」

ケンさんが慌てて逃げ出す。ぼくとヒロタも後を追う。

「こらーっ、お前ら何してるーっ！」

作業服姿のおじさんが猛烈な剣幕でこっちに走ってくる。

ぼくらは全力で走る。入ってきた方向に向かって走る。

作業服のおじさんが追ってくる。

あら、見ると二人に増えている。

やばいよ、やばいよ。ぼくらは夢中で走る。

どうにか先ほど乗り越えたフェンスにたどり着く。

例によってぼくが真っ先に飛び越えて、後の二人をサポートする。

「ヒロタ、早くここにつかまって」

「サンキュ」

「ケンさん、ランドセルそこに置いといたから」

「お、おう」

何とか二人ともフェンスを乗り越えた。

「よし、余裕で振り切ったぜ」とヒロタがガッツポーズ。

「逃げよう。顔を覚えられるとまずい」

「あーっ」

その時突然ケンさんが悲痛な声を張り上げた。

「家の鍵、あそこ、あそこ！」

見るとフェンスから１メートル位入ったところにキーホルダーが落ちている。

「俺んちの鍵、どうしよう！」

「待てこらあーっ」

猛然とダッシュしてくる作業服の二人。フェンスまであと20メートルってトコか。

ぼくはすかさずジャンプした。片手だけでフェンスを飛び越え、キーホルダーをつかむと、カウボーイハットの時と同じようにノンステップでフェンスに舞い戻り、あとは右手の力だけでからだを回転させながら飛び越えた。

反対側に着地すると同時に鍵をケンさんに渡す。ケンさんの手の中でキーホルダーについた鈴がチャリンと鳴った。

「逃げるーっ」ケンさんが叫ぶ。

ヒロタがランドセルを構えていてくれたので、ぼくはそのまま走り出すことができた。そしてフェンスから死角となる路地に駆け込むと、ぼくらはそこで息を整えた。

それからの帰り道、ぼくらは遺跡の話はしなかった。だまって歩き続け、いつものようにT字路でヒロタと別れた。

東の空が夜になる準備をしている。

「サルト、さつきはありがとな」

二人きりになった時、ケンさんが歩きながら突然ボソツと言った。

ぼくはいつものようにニヤニヤしながら首を振った。

感謝された。

ぼくはケンさんに、感謝された。

ナンバー2になるより、ひよつとしたらすごいことだ。

「サルトの身軽さには、マジで感心したよ」

ぼくはこのまま学校に戻り、教室の後ろの黒板の端っこあたりに書きたい気分だった。ぼくは、ケンさんに感謝された、と。

でも、夜になる準備をしていたのは、空だけではなかった。

ケンさんはそのあとにこう付け加えたのだ。

「ただ、感心できねえことが、ひとつある」

「え、それは、どんなこと？」

ケンさんはズボンのポケットに手をつ突っ込んで、ぼくの前に立ち
はだかった。

ポケットからチャリ、という鈴の音が一瞬間こえた。

「エロタのことをエロタって呼ばない」

「ええー？」

「どうしてだ？」

「どうしてって…その…」

「特に理由はねえんだな」

「う…ん、ないって言うか、えへへ…」

「じゃあ呼べ」

「へ？」

「明日から、必ず呼べ。分かったな」

かー、どうしよう。

ぼくは猛烈とニヤニヤしている自分の顔を想像しながら、一つの
ことを解明した。

エロタの件ではない。ニヤニヤだ。

どういう時にぼくはニヤニヤするのか、やっと分かった。

そして空よりも先にぼくの心が、夜になった。

父ちゃんが作った最初の校歌

日曜日。

ぼくはアコースティック・ギターの音で目を覚ました。

ぼくのうちは築二十年の木造二階建て一軒家だ。

二十年もたつと、さすがに家のあちこちがかたむいてくるみたいだ。昨年、下水道工事でやってきたお兄さんに、ずいぶんかたむいていますね、と言われた。そんなことあるか、とくつてかかった父ちゃんに、お兄さんは巨大な温度計みたいな機械を玄関の柱に当てて見せた。よく分からないけど、目盛りが片方にぐんとななめになっていた。ドアのしまりが悪いのはそのせいらしい。

そしてもつとおどろいたことに、父ちゃんも僕も、うちがななめになっていることに気付きもしなかった。

この家はもともと母さんのお兄さん、つまりぼくの叔父さんの持ち家だった。しかし、十年前、ひよんなことからうちの両親が安く譲り受けることになった。

叔父さんは洋服の裁断や寸法直しの仕事をしていた。昔はこのうちにミシンがズラツと並んでいたらしい。

でも時代の波には逆らえなかつたみたいだ。年々仕事量が減っていき、ついにはここを引き払うことになった。今、叔父さんは大阪のある大手服飾メーカーで働いている。腕を買われた、つてやつだ。大変だっただろうけど、なんだかかつこいいい。

その叔父さんが仕事場として使っていた一階の部屋の入口には、小さな四角い金属プレートがかかっている。塗装が半分以上はげ落ちていているが、そこには「テラー林田」の文字が十年以上経った今でもかるうじて読み取れる。

いや、読み取れない。

え？　なんだ、なんだ、このマジックで書かれた文字は。

林田、の文字が二本線で消され、佐藤、に変わっている。
そしてテラーの、テも消されて、その上にロックンロ、という
文字が真新しいインクで書き足されている。

ロックンローラー・佐藤。ふう。父ちゃん…。
全く、まるで、コドモだ。

それにしても、うるさいよ。日曜の朝くらい、もうちょっと寝坊
させてよ。ぼくは目をこすりながら、ロックンローラー・佐藤の作
業場のドアを開けた。

父ちゃんは、ギターを弾いていなかった。音は、でかいばかりで
安物と一発で分かる、年代物のラジカセから鳴っていた。

「おう、寝坊助、起きたか」

「起こされた、って言うって欲しいなあ」

「まあ聞け。できたんだ、校歌」

そう言った父ちゃんの声に、父ちゃんの唄う声がかぶさった。

ぼくが寝ている間に録音まで済ませたらしい。

どちらも父ちゃんの声だけど、ラジカセから聞こえる方は、父ち
やんの本物の声を甘口のめんつゆに浸したような声だった。

で、問題の歌はと言うと…。

率直な感想。

実に、なんか、想像していたよりまともだった。

つーかい歌だった。

父ちゃんがそんななので、ぼくは物心ついた時からギターの生音
が近くにある環境で育った。しかし年を重ねるごとにその音色が我
が家に響く機会が減っていった。そして母さんが死んでからは、考
えてみたら父ちゃんはほとんどギターにさわらなくなっていた。

父ちゃんはエレキギターとアコースティックギターを一本ずつ持
っていたが、エレキの方はもう何年も押入れの奥にしまわれたまま
になっている。

で、父ちゃんがたまにギターを弾きながら唄う歌は、

海辺を飛ばすぜハイウエイ　とか、　いかしたあの娘はポ

ニ―テイルがどうのこうの〜 だとか、ぼくにとってはうわごと
にしか思えない内容の歌ばかりだった。

それが、その父ちゃんが…。

メロディーは単調で、曲の構成は飛ばすぜハイウェイ、と同じよ
うなもののだが、あんなにテンポが速くないぶん、なんていうか、
あつたかくて、ぼうつとしていても自然と耳の中で溶けて広がり、
ちゃんと日本語の言葉になって心まで届く、みたいなの…。

ああ、だめだ。説明できない。

とにかくいい歌だったのだ。

歌詞も、ぼくの心を打つものだった。

ぼくらはただ走るんじゃなく カッコよく走りたいのさ

何かにつまづいたとしても カッコよく転んでやるさ

怒りがこみ上げてきたならば カッコよく叫んでそれを伝え

涙が頬をつたったら カッコよく大地に染みこませてやろう

咲くがいい 花たちよ その水分を糧にして

育つがいい 花たちよ かなしい台学園 高等学校で

歌が終わってからしばらく、父ちゃんは何も口に出さなかった。

なんとなくぼくの感想を怖がっているようにも見えた。

「いい歌じゃん」

「そ、そうか」

「うん。ちよつと分かりやすすぎて校歌っぽくないけど」

そう言つと父ちゃんは、照れくさそうに千葉県モミアゲをなでな
がら少しだけ笑った。

ぼくは、机の上に置いてあつた例のチラシを見た。

応募方法 MDまたはカセットテープに録音して、下記あて
に郵送してください。

外では蝉がカッコよさを競うように鳴いている。

とりあえずぼくは居間に行って、ダンスの引き出しをあさった。

封筒は、確かここだった。

ぐつとくるニュース

「きゃあ！ 先生の背中に変な虫がついてる！」

校舎の裏庭にある小さな菜園で、へチマの観察日記を書いている時だった。一人の女子がそう叫んだため、何人かがワツと陣内先生の背中を囲んだ。

「変な虫って、何だよ」

陣内先生はそう言っただけ汗をぬぐった。

「分かんない」

「見たことない」

「変な虫」

「きゃあ、動いたあ！」

みんな勝手なことを言っただけ騒ぎ立てるモンだから、先生もさすがに不安になって、それを見ようと肩越しに首を伸ばした。

「誰か、虫に詳しい人いなかったっけ」

「あ、それならヒロタくんが詳しいです」

ぼくが言うと、何人かの女子がうなずいた。ヒロタは小さい時から虫が好きで、うちにはいつも分厚い昆虫図鑑が並んでいた。と言っても、もとは売り物だったわけだが。

「そうか。じゃ、ヒロタを呼んできてくれ」

先生の言葉にうなずいて、ぼくは菜園をぐるっと見渡した。

「ヒロタ！」

端っこの方でけんめいに色鉛筆を走らせていたヒロタには、ぼくの声が耳に入っていない。ぼくはすぐさま走りよって、再び声を掛けた。「おい、ヒ…」

「ヒロタ、という続きが言えなかった。」

となりでぼくをにらみつけるケンさんの顔が見えたからだ。

「…じゃなくて、エ、エロ…」

「やっぱり呼べない。」

「ん？ サルト、どうした？」

ヒロタが顔を上げた。

そのとなりでケンさんが、くちびるの端っこだけで一瞬笑った。

ぼくはいつものニヤニヤが、全身からじつとりとにじみ出てくるのを感じた。すっばい汗と一緒に。

しばらく雨の日が続いた。

ぼくはヒロタのことをいつしかおい、とか、ねえ、とかで呼ぶようになっていた。

全く失礼なことだ。なんだかやりきれない。

だったらなんとかすればいいのに、ぼくは、ダメだ。

ぼくは、ダメなやつだ。

さらにダメなことに、ぼくは自然とヒロタをさけるようになった。ヒロタは何も悪いことはしていない。

このままぼくとヒロタが疎遠になったら、きっと世界一くだらない理由で疎遠になった二人、としてギネスブックに載るだろう。

なんか、本当にくだらない。

たまにはぐつとくるようないいことが起こってよ。

やっと雨が止んだ日の放課後、ぼくは空に向かってぼつりつつぶやいた。そしたら、ぐつとはこないまでも、ちよつとだけいいニュースが舞い込んだ。

「ただいま」

玄関に上がると、いきなり父ちゃんのカン高い声が耳に入った。

「はい、はい、それはもう、ごもつともで」

ロックンローラー・佐藤の作業場のドアが開いている。

誰かと電話でしゃべっているらしい。

それにしても父ちゃんのこんな口調、初めて聞いた。

「そうっすよねえ、いやあわたくしも実に同感です、はい、はい、承知しました、お任せください、すぐ手直しいたします、はい」

見ると作業場で父ちゃんは、受話器を握ったまま見えない相手に

何度も頭を下げていた。

ネクタイをした人が駅前とかでこんなふうに話しているのをぼくはよく見かける。父ちゃんみたいなアホでも、大人になったら姿だけではなく、声に対しても礼儀正しくするんだ…。

『礼儀正しく』

なるほど。だから先生たちは、わざわざ筆で書いて、額縁に入れて教室に飾るわけだ。

「はい、はい、では失礼いたします」

父ちゃんは結局三十回くらい頭を下げて、受話器を置いた。そして深くため息をついた。

「ただいま」

「お、おう、コクト。おかえりつくくらぶとん」

あれ、動揺している。

父ちゃんは動揺した時、決まって意味不明のギャグを言う。

「電話、誰からだったの」

ああ、校長先生だよ。なずな台学園の。ほら、この間父ちゃんが校歌を…」

分かってるよ。で、何だって?」

「うん。採用だって」

「本当に?」

「本当さ」

「凄いじゃん」

「ま、俺の才能からすると、当然と言えば当然だけどな」

ぼくはマジで凄いなと思ってた。

父ちゃんって、本当に音楽家だったんだ。

っーか、いいの? あれが学校の校歌になっちゃうの?

やっぱ高校って、小学校と違うんだなあ。

ぼくの通っている小学校の校歌なんか、意味が分からないどころか、これって日本語? って言葉の連発だ。あ、でも…。

「そう言えばさっき、手直しがどうとか言ってたけど」

「あ、ああ。ちよこつとだけアレンジを変えて欲しいって注文があつてな。だから、そんな朝飯前だぜ、って言ってやったよ」
言つてなかつたと思うけど。

なにはともあれ、良かった。ぼくもあの歌、いいと思う。

ぼくは父ちゃんのことを初めて、ちよっぴり尊敬した。

へチマの種くらい。

六時間目の悪魔

タイムマシンが目の前にあったら、ぼくは何百年か前のアテネに行って、走り出そうとしてしているやつのことを必死で止めてやる。

だって、そいつが（そいつらが、かな）走っちゃったから、マラソンなんていう競技が生まれたわけでしょ。

ぼくは国語や算数みたいに座ってやる科目は苦手だ。

もうこればかりは遺伝なのだから、仕方がない。と、勉強が得意なのはとりあえず父ちゃんのせいにして、マラソンの話。

自慢じゃないけど、あ、うそ、自慢だけど、春に行われたスポーツテストでぼくはクラスで1番の記録を出した。

反復横とびで。

まあ確かに50メートル走やソフトボール投げに比べると、自慢されてもちよつとビミョー、ってカンジの種目だけど、でも1番は1番だ。

考えてみたら反復横とびって、ぼくのためにあるような種目だ。

でもね、50メートル走のタイムだって、ぼくはクラスで4番目から5番目だったんだ。

短距離は、やっぱり鍛えてるやつにはかなわない。なんだかんだ言って結局少年野球チームのエースとか、サッカーチームでフォワードやってるやつらが上位を占めるんだ。なんであいつら、ぼくと同じクラスなんだよ。って、一クラスしかないから仕方ないか。

要するにぼくは、勉強はできないけど、運動ならそこそこいけるってことが言いたかったのだ。

そんな体育人間のぼくが、どう転んでも1番になれそうにない種目がある。

持久走だ。

この種目に身軽さは要求されないらしい。陣内先生に言わせると、マラソンに要求されるのは気力と、持久力と、根性だそうだ。

ぼくはない3つだ。あーあ、ダメじゃん。

先生、あなたの正体は、悪魔ですか。

「はい、みんなよく聞け」

六時間目のチャイムが鳴った時、悪魔は突然そう言った。

「来月の8日は待ちに待った開校記念日で学校は休みだ。月曜日だからなんと三連休になる。そして今から約束しておく。先生、その週は宿題を出さない。みんな精一杯、からだを動かして遊ぶように」

わあ、先生。あなたは悪魔じゃない。天使だ。

みんなやったあ、とかラッキー、とか言っけて手をたたいた。

「なぜかと言つと」

え？　なんか続くの？

「翌日の9日は、我が校のマラソン大会だからだ！」

えー。

えー。

えー。

奈落に落とされたみんなの嘆き。

なんだかしてやったり、という表情の陣内先生の顔。

気が付いたらぼくは、その顔に向かって小さくつぶやいていた。

「この悪魔め……」

その日、うちに帰るとまた父ちゃんのカン高い声が、作業場から響き渡っていた。

「だははは、そうつすよね、やっぱ歌詞って大事つすからね。はい、

はい、そりゃもう、心得てますです、はい」

父ちゃんは、なんか気楽でいいなあ。

「わっかかりましたあ。じゃあ今週中に直してお届けに上がります、はい、はい」

ぼくは台所にランドセルを置いて手を洗い、コップで水を飲んだ。もう9月の終わりだというのに、水はまだまだ生ぬるく、おじいちゃんんちの歯磨き粉みたいな味がした。

「そんなあ、そう言ってもらえるだけで、光栄であります。かなり

マジで、ありがとございますです。そんじゃ、失礼しまーす」
がちゃ。

「変な敬語」

「どわっ」

父ちゃんは大げさにのけぞった後、ぼくの頭をぺしつとたたいた。

「ばか。驚かすな。ただいまくらい言え」

「言ったけど、父ちゃん電話中だったから」

「ん？ どうした、元気ねえなあ。しょんべんでも漏らしたか」

「しょんべん？」

あまりのばからしさに、ぼくは答えるどころかあきれってしまった。

「父ちゃんは、元気そうだね」

「あつたりめえだ。父ちゃんはミュージシャンだからな。今、校長先生もおっしゃってたけど、校歌って学生時代だけのもんじゃなくてよ、卒業してからもずーっと残るもんなんだ。そんなすげえ歌を、俺は作ってるんだぜ。最初からスタンダードナンバーになることが約束されてるわけよ。そんな曲、永チャンだつて作ってないぜ」

「父ちゃん、実は来月にマラソン大会があつてね」

「そうか、がんばれよ。そんで俺の歌が注目されれば、他の学校からも校歌をこしらえて欲しいなんて依頼がくるかも知んねえ」

「がんばれって、それだけかよ」

「なに、他に何か言つて欲しい？」

「いや、別にいいけど」

「そんなことよりも、どうする？ 俺が世界初の校歌ミュージシャンとして有名になつちやったら。うおお。再デビューも夢じゃないな。そっかあ、俺にはやっぱ、これしかないんだよ。どうしよう。」

「どこのレコード会社にしよう」

だめだ。父ちゃんに言つても始まらない。

ぼくはあきらめた。

どーしよっ、どーしよっ、なんて唄いながら父ちゃんはギターを肩に掛け、じゃかじゃか鳴らし始めた。なんか、全然どうしようっ

て顔じゃない。バカみたいに首を振り、千葉県モミアゲを上下させて白い歯を見せている。

悩みも聞いてくれず、おまけに騒音をまきちらすほどの父ちゃん。アホで、単純で、大人らしいところが一つもないぼくの父ちゃん。これが親だと思つと、なさけなくなってくる。

どーしよつ。どーしよつ。

まだ唄うか。

…あれ。でもなんだかいつもの怒りが沸いてこない。なんでだ？ 父ちゃんはギターを鳴らしながらお尻をくいつ、くいつ、つと振っている。

そうだよな。確かに、がんばればいいんだよ。

それだけだよ。

ぼくとしてはすぐ不本意だけど、なんか、やる気が出てきた。

ぼくは本来、体育が得意なんだ。つて言うか、ぼくにはそれしかないんだ。うわ、なんかカッコいいセリフじゃん。アホの父ちゃんだけに言わせておけるか。

よーし、小学生最後のマラソン大会だし、とりあえずがんばってみるか。

「いてててて」

突然父ちゃんが腰に手を当てて顔をしかめた。

「振りすぎなんだよ。トシを考えろ」

ビーバーの巣には住みたくない

翌日からぼくは、ちょっとだけ早起きして近所をランニングするようになった。なんか健康的で、実にぼくららしくない行為だなんて自分でも思ってたけど、さすがに朝の空気は気持ち良かった

最初の日は路地を1周。次の日は2周。その次の日は3周、とだんだん距離が伸びていき、ペースも上がっていった。

そして何よりも驚いたのは、いつも自転車で通り過ぎている路地に、ぼくの知らなかったことをいっぱい発見したことだ。

へえ、こんなところにお地藏さんなんかあったんだ。

なんだよこのうち、お化けが出そうだな。

クラリネット教室か。そんなの習うやついるのかよ。ははは。

ぼくの大好きなクラリネット、パパからもらったクラリネット……。

気が付いたらぼくは、走ってる間、そんな歌を口ずさんでいた。とおっても大事にしてたーのにい。

そのうちに、陣内先生は間違っている、と思うようになった。マラソンに必要なのは根性なんかじゃない。

歌だ。

どーしよっ、どーしよっ、オーパツキヤマラドパツキヤマラド……。こうしてぼくは、走るリズムを少しずつからだで覚えていった。ところでパツキヤマラドってなんだ？

でもそんなパツキヤマラドな朝も長くは続かなかった。

学校には先生の他にも、もっと夕チの悪い悪魔が待ち構えていたのだ。

「なあサルト、今年のマラソン大会だけだよお」

月初めの班変えで運悪く同じ班となったケンさんは、その日の掃除の時間、さっそくぼくにモップを押し付けながらそう言った。

「三人で同時にゴールしないか」

「え、えへへ、三人って？」

「決まってるだろ、俺と、サルトと、エロタだよ」

「いや、でも、ヒロ…」

「あんっ？」

ケンさんが、何もそこまで、というくらいに顔を近づける。

ちゃんと立っても、ぼくの目はケンさんのあごの高さだ。

「そ、その、エロ…タが、なんて言うか」

「あいつはもうとつくにオーケーしてるよ」

ケンさんは身長だけではなく、それ以上に横幅もかい。だからそのパワーは計り知れないものがあるので、みんなは彼を恐れるのだった。もちろんみんなの中にはぼくも含まれる。

でもパワーはあくまでもパワーであって、運動神経に結びつくとは限らないらしい。とりわけ持久走ではその巨体が重荷となって、いつも最初に息を切らすのはケンさんだった。

「な、どうせ俺たちはベツケの方なんだから、最後の大会は仲良く三人でゴールしようぜ」

それってつまり、オレを抜かすな、ってことじゃん。
「でもあの」

走るペースをせつかくつかんだんだ。それにぼくは、ぼくには、体育しか、得意なものがないから…。

「なんだよ、いやなのか」

「別にいやだとか、そういうんじゃない…」

「じゃあ、分かったな」

「ええー？ ぼくには、たいいく、し、か…」

「う、うん…。えへへ」

キーンコーンカーンコーン。掃除の終わりのチャイムが鳴った。

ケンさんはいつものようにくちびるの端っこだけでふっ、と笑い、歩きかけて足を止めた。

「いつも思うんだけど、サルトのそのニヤけた顔」

そう言っただけでケンさんは、何かとつてもかわいそうなものを見るような目でぼくを見た。

「はつきり言っただけで、キモいよ」

以前テレビで見たビーバーの巣作りの光景が、ぼくの頭の中によみがえった。

長い時間をかけて川の中腹にせつせと枝を積んでいくビーバー。やがてその枝が流れをせき止めて、屈強なダムの家となる。

ぼくには、体育しかないから……。そんなカツコよすぎるセリフが川の流れであり、枝がニヤニヤだ。セリフを、言いたいことを、ニヤニヤはいつだってせき止めるんだ。

そんな巣には、ぼくは住みたくない。そんな家で、暮らしたくない。そんな世界で、生きていたくない。でもぼくにはそのダムが、どうしてもこわせない。

ああ。ぼくは本当に、生きていたくなかった。

世界にはどうして、言葉なんかがあるんだよ。

最初に言葉をつくったやつは誰なんだよ。

タイムマシンでどこまで行けば、そいつに会えるんだよ。

ぼくはそいつを許さない。

言いたい言いたいことを言い合っただけで、人間は今までの損をした？

「言いたいことが言えないヤツは、確実に不幸な目にあう」

ぼくの耳になぜかあの時の不良じいいの声がよみがえった。

そんなのうそだ。言いたいことを言い合わなければ、戦争だって起きなかったはずだろ。

いいじゃん、別に、伝えなくたって。伝わらなくたって。

ああ、ぼくはそいつを許さない。

最初に言葉をつくったやつを、絶対に許さない。

その日はランドセルがとてつもなく重たかった。

住んでいるやつがななめだから

玄関のドアが閉まっている。

ぼくは鍵を開けて中に入り、内側から鍵を閉めた。

靴がない。父ちゃんどこ行った。またパチンコかあ？

台所の床にランドセルを置いて、冷蔵庫から麦茶を出して飲んだ。残りが少なかったので、おかわりできなかった。父ちゃんのアホちゃんと補充しといてって言ったのに。いてっ。

コップを流し台に運ぼうとしたら、ランドセルにつまずいた。

くそっ。ぼくはランドセルを蹴飛ばして隅に押しやった。

見ると作業場のドアが開いている。

中に入ると父ちゃんのギターが立てかけてあった。ぼくはなんとなく手にとってみた。ひざに乗せて、親指でポロンと弾いてみた。

深く、透明な空間に吸い込まれるような音が鳴って、部屋じゅうにしばらく響いた。初めてだ。考えてみたら、こんなに近くにありながら、ぼくは初めてギターを爪弾いた。

うんと小さい頃、ギターに触って父ちゃんにえらくしかられたことがある。それ以来、ぼくは触ったことがなかった。

いい音だ。なんだ、ギターなんて簡単じゃん。それを父ちゃんはまるで聖なるもののように大事にして。大してうまくもないくせに。

なんだよ。

なんだよ。

こんなのちよつと覚えたら、ぼくはあつと言う間に父ちゃんよりもずつと上手に弾けるようになるよ。ぼくは試しに、左手で適当な位置を押さえて、また右手の親指でポロンと弾いてみた。

今度は音が全く出なかった。あれ？

もう一回。あれ？ も一度。あれ？ あれれ？

左手の指先が痛くてもう押さえられない。くそっ。

ぼくは乱暴にギターをスタンドに戻した。

こんな楽器、やるやつのが知れない。何がメッセージだ。何がロックンロールだ。どうせ何も伝わらないんだ。伝えることなんかできないんだ。

いいじゃん、別に、伝えなくたって。伝わらなくたって。

ラジカセの上には、例のなずな台学園のチラシが乗っていた。

何が校歌だ。ギターのはーか。父ちゃんのはーか。

ぼくはそれを丸めてやみくもに投げつけた。

チラシは開けっ放しのドアに当たって、そのまま台所の床までころころころと転がっていった。いくら家がななめになっているからって、そんな遠くまで転がっていくことないじゃん。大げさなんだよ、ばーか。どいつもこいつも、ばーか、ばーか、ばーか。ぼくは部屋を出て作業場のドアを乱暴に閉めた。と同時にひっくり返った。つまりいたのだ。またランドセルに。

うつ…うつ…。

泣いているわけじゃないよ、念のため。うつ…。

右足の小指が痛い。きつとどこかにぶつかった。

うつ…うつ…あああああ。

ぼくは、泣いてなんか、いないよ。

涙じゃないよ。麦茶、おかわりしなかったもん。

だからぼくのからだには、そんな余計な水分なんか、ないんだ。

あああああーん、あああああーん。

なのに、なぜかにじんで、ななめになった台所の床がにじんで、そこにほっぺを押し付けて、ぼくは、ぼくは、うつ、うつ、うつ、あ…。

鼻先に、何かが触れた。先ほど投げつけたチラシだった。

裏側の白い部分にボールペンで書かれた文字が見えた。

「もしもし」

「やっとかけてきおったな」

「え？」

「待ってたぞ」

「ぼくが誰だか、分かるの？」

「当然だ。これでもわしは、お前のコーチだからな」

信じられない。テレビ電話か、これ。

不良じいいの声は、あの時に比べて低音で、なんか蚊取り線香の近くで煙たがりながらしゃべっているような感じがした。

「あの、ぼく…」

「どうした」

「あの、あの…」

「相変わらず病気は治ってないみたいだな」

「病気？」

「言いたいことが言えないなんて、わしに言わせりゃ、もう立派な病気だ」

「ぼくは、いたって健康だよ」

「ははは、これはからだの病気とは違う。かと言って心の病気でもない。お前の存在自体の病気なんだ」

よく分からない。分からないけどぼくは無性に腹が立った。

くそう。足の小指がズキズキする。

「よく分からんか」

「うん。分かんないよ」

「そうだよな。わしもガキの頃はよく分からんかった。でも、分からんからって、泣いても何も始まりやせん」

うわ、やっぱこれ、テレビ電話だ。きつとカメラがどこかに…。

「へ、変なこと言わないでよ。ぼく、泣いてなんかいないよ」

「つべこべ言っつてねえで、まずは表へ出る」

「表へ？」

「そうだ。なるべく人がいっぱいいる所だ」

「そんな所に行っつて、どうすんのさ」

「聞くんだよ。目えつぶっつてな」

ますます分からない。このじい、本格的に脳みそが反復横とびしているのかも。

「たとえばだ。往来の真ん中に立って、目をつぶってみる。そうすつと、いやでも耳がこえてくる。いろんな物音に混じって、人の声が入ってくる。大して意味もなく、くだらないやりとりが断片的に耳に入ってくる。男の声、女の声、若い声、年老いた声。次第にお前の耳は、くだらない言葉たちでいっぱいになる。ああ、くだらないくだらない」

「なんだよそれ。本当にくだらない」

「その通りだ。でもな、今のお前に必要なのは、本当にくだらない、って実感することなんだ」

「それが、言いたいことを言うための、何になるっての」

「ワザだ」

「ワザ？」

「言ったはずだぞ。わしは、ワザを教える、ってな」

その時、玄関の鍵がガチャガチャと乱暴に開けられる音がした。

父ちゃんだ。

ぼくはとつさに電話を切ってしまった。受話器がうまく乗っからず、何度か電話機のへりにぶつけた。ガチャガチャンという音がきつとじじいの耳を容赦なく襲っただろう。いいよ、あんな脳みそ反復横とびじじい。

ぼくはあわてて作業場を出た。洗面所の鏡をのぞいてほっぺの染みを指で消した。そして平静を装うために猛スピードで笑顔を作った。ホントだ。キモい。あー、ちくしょう。

玄関では、父ちゃんが小さな紙袋を抱えたまま靴を脱いでいた。

「父ちゃんお帰り。どこ行ってたの」

「ん、何だよコクト、気持ちワリイなあ」

かー。父ちゃんにだけは言われなくなかった！

「何だよ気持ち悪いって。ぼくだってこんな顔になりたくなかったよ。でも父ちゃんがブサイクだから、なっっちゃったんじゃないか！」「ちよつと待て。俺は、お前が笑顔でお帰りの、なんて出迎えたことを気持ち悪いと言ったんだ。普段は絶対にしないくせに」

げっ、なんだそうか。確かにぼくは、なんでそんなことをしたんだ。つーか、なんでぼくは電話をあわてて切らなきゃならなかったんだ。どうかしてる。どうかしてる上に、今日はなんだかダメだ。怒りのふたが閉まらない。

「別に、いいじゃん。ぼく、父ちゃんが前みたいになんか働かなくなったら、毎日玄関まで出迎えてやってもいいんだぜ」

「バカ。俺は働いてんだよ。今日だってこうして校長先生と打ち合わせをしてきたんだ」

父ちゃんはそう言って紙袋をぼくの顔の前に突き出した。

「いいかコクト。俺はミュージシャンなんだ。ソングライターなんだよ。それも、たくさんの少女少女たちの将来になう大事な歌を作ってるんだ。だから忙しいんだよ」

それから、また父ちゃんの校歌自慢が延々と始まった。

相変わらず世界を一人で動かしているような目の輝きを見せて。

これだ。ぼくはこれが予想できたから、あわてて電話を切ったんだ。今の父ちゃんは、言いたいことも言えずにニヤニヤしているぼくのことを、本気でキモいと笑うだろう。そしてそれをこども電話相談室みたいに知らないじいじい相手にしゃべってるなんて知ったら、おそらく死ぬまでアホ笑いのネタにされる。

ちくしょう。ちくしょう。

やばっ。また目の奥の方がかゆくなってきた。

「もういいよ！」

ぼくは、まだしゃべっている父ちゃんの腕を両手で押して、玄関に下りた。その拍子に父ちゃんの手から紙袋が落ちた。中からたくさん紙切れが飛び出して、その一枚がぼくの靴の上に乗った。きつたない字の列。父ちゃんの手。その上に赤ペンで線とかバツテンとかがいっぱい塗りされて、元の字がほとんど読めない。

父ちゃんはそれをあわてて拾い集めながら、こう言った。

「コクト、どこ行くんだ。まだ話は終わってねえぞ」

「どこだっていいだろ」

「じゃあ最後にこれだけ聞け。お前の顔はイケてるし、それ以上に父ちゃんの顔はイケてる。つまり俺たちはブサイクなんかじゃないんだ。証人だっている」

「証人？」

「ユカリだ」

「…あのさ」

ついにぼくはブチ切れた。

そして自分でも意味不明のセリフをはいた。

「父親らしいことを何一つしてないくせに、母さんの名前を軽々しく口にしないでよ！」

ボタン！

玄関のドアを力まかせに閉めて、ぼくは外へかけ出した。

今の衝撃で我が家はいつそうかたむいたに違いない。

いいよ、どんどんかたむくがいいさ。どうせ住んでるやつもななめになつてるんだ。社会に対してななめに生きてる大人と、世界に対してななめに生きてる子供。やっと分かったよ。ぼくらがななめに生きてるから、家もななめになっちゃったんだ。

クラリネット教室の看板がある角まで、ぼくは一気に走った。

父ちゃんは、追っては来なかった。

ケツメドボンバー！

県境を流れる川の土手に上ったら、思ったより太陽が上の方にあったのでぼくはちよっぴり安心した。

だって、目の前にダイナミックな夕日がどーんと現れでもしたら、思わず「ばかやろーっ」なんて叫んでしまっただったんだもん。

でも、草むらの中で静かに鳴き始めたカエルたちが、ぼくに向かって「バカヤロ、バカヤロ、バカヤロロロ」と言っているような気がしたので、なんだか腹が立った。

「ばかやろっ…」

結局ぼくは、そうつぶやいていた。

どいつもこいつも、カエルまでも、ぼくをバカにしやがって。

河川敷のランニングコースをあてもなく歩いていると、なんだか視界がにじんできた。鼓膜にこびりついていたいろんな声が、かさぶたみたいにはさばさとはがれて、耳の奥に落ちた。

「三人で一緒にゴールしようぜ」

「お前のその顔、はつきり言ってキモいよ」

「お前の存在自体の病気なんだ」

「俺はミュージシャンなんだ。だから忙しいんだよ」

ちくしょう。

往生際の悪い夏の風が、秋の風にとつちめられながら通り過ぎる。

ぼくの前髪がふわっと揺れる。

ころころころ、とアスファルトの上を空き缶が転がる。

ちくしょう。ぼくはその空き缶を思い切り蹴飛ばした。

いてっ。

さつき台所でぶつけた足の小指に激痛が走った。ぼくの痛みを乗せた空き缶は空へ高く舞い上がり、見事な放物線を描いた。そして土手のへりに立つ柳の木の枝に突き刺さったまま落ちてこなかった。ぼくもあそこに突き刺されば、あっさりとこの世から消えてしま

えるのかな。

ぼくは、はつきりとものが言えないし、言えたとしても、キモいし。唯一の親は、だらしなくて情けなくて千葉県モミアゲのどうしようもないアホだし。

もういつかなあ。

消えちゃおうかなあ。

このまま父ちゃんと暮らしていても、いいことなさそうだし。それになによりも、走りたくないし…。

ああ、ズキズキしてきた。

足の痛みだけが、ギリギリのところまで現実感の扉を開いていた。

「あれ、佐藤さんトコのぼっちゃんじゃない」

駅前のドーナツショップが目に入った。気が付いたらぼくは、片足を引きずったままこんなところまで歩いてきた。

ぼくに声をかけてきたドーナツショップのおばさんは、制服ではなく普段着だった。

「しばらくぶりね。なに、今日はお出かけ？」

「あ、いや、はは…」

「ああ、まさかデートじゃないでしょうねえ」

「ち、ちがいます」

ホントに、どうかしてる。

ぼくはよく母さんとここにドーナツを買いに来た。母さんはこのドーナツが一番おいしい、と言っていた。何度か来ているうちに、店のおばさんとも顔見知りになった。母さんの四十九日の日になってもこのドーナツを供えてあげたくて、ぼくは一人で買いに来た。わけを話したら、おばさんは頼んでもいないのに大きな箱いっぱいのおファミリセットをぼくに持たせた。

「そうよね。小学生がこんな時間からデートしたら、先が大変だね。あ、ちょっと待ってて」

そう言っておばさんは裏口から店に戻ると、紙袋をひとつ抱えて

出てきた。

中から何人かの「おつかれさまでしたあ」という声が聞こえた。

「これ、お父さんと二人で食べて。じゃあね」

おばさんはそう言っ手て手を振ると、点滅し始めた青信号を足早に渡って行った。

手渡された袋の中からは、ドーナツのいいにおいがした。

「ありがとう」

ぼくが言つと、おばさんは一度だけ振り返ってニコツと笑い、人ごみの中へ消えた。

ぼくは思わずぎゅっと締めたくなった。自分のからだをきつく、きつく、締めたくなった。そうでもしないと、何かがあふれてきそうだったのだ。目の奥から。

まぶたをぎゅっと締めたので、世界はまっくらくらになった。

深い暗闇の中で、ドーナツをほおばる母さんが見えたような気がした。おいしいね、刻人…。

母さん…。

かあさん…。

かあ、「ケツメドボンバー！」

んん！

ぼくは飛び起きるようにして目を開けた。

目覚めたばかりのネオンたち。到着するバス。走り出すタクシー。そして歩道にあふれかえる人、人、人。

考えてみりや、駅前が最もにぎわう時間帯だ。どいつもこいつも反復横とびでも始めそうな勢いで、夜の始まりとたわむれている。

くそう。誰だ、ぼくの大事な思い出の邪魔をしたヤツは。

何がケツメドボンバーだ。

パッキヤマラドよりも意味不明じゃないか。

バス停に並んでたり、ガードレールに腰掛けていたり、立ったり座ったり歩いたり止まったりしながら、みんな大声で勝手なことをしゃべっている。ちくしょう、どいつだ、どいつの声だ…。

ぼくは犯人を割り出すために、もう一度目を閉じてみた。声の特徴ならまだ覚えている。何しろケツメドボンバーだ。また同じようなくだらない言葉を発するに違いない。

どこにいる、ケツメドボンバー。

「ご乗車ありがとうございます」

「ああっ、てめえ返せよ、つて俺んじゃねえし」

「いいですね、フグなんて最近せんぜん…」

しっぽを出せ、ケツメドボンバー。

「なんかさあ、超マジやばくない？」

「民営化のあたりなんだかどーだか。しかも黒ですよ」

「ただいまキャンペーン中でーす、プロバイダーの新規…」

「もしもし、ごめんね、反対側に出ちゃったあ」

しっぽを出すんだ、ケツメドボンバー。

「お前の穴は、ふし穴か！」

「いやーん、にやははは、まじムカつくう！」

「分かりました。分かりました平目のムニエル！」

しっぽを…。

「平気平気、そんなのノー・プログラムだぜ」

「その点うちのダンナなんか、朝からアザラシ状態よ、おほほ」

「ネカマの戦士、キターッ！」

しっぽを…：出さなくていい、ケツメドボンバー。

ぼくはゆっくりと目を開けた。

たぬきみたいに目の周りを黒くした女子高生。両手で一生懸命メーグルを打っている中年のサラリーマン。ダボダボの服を着た坊主頭の集団。顔の半分が口のような声のでかいばあ。あごでタクシーを停めているパンチパーマのおじさん。おそろいの紙袋を抱えたオタクっぽいお兄さんたち。真っ赤な顔をしてふらついているおじいさん。白目をむき出しにして大笑いしているカップル…。

くだらない。なんてくだらないんだ。

お前ら全員、ケツメドボンバーだ。

この世は全て、ケツメドボンバーだ。

母さん、世界はとうとう、ケツメドボンバーになっちゃったよ。ケツメドボンバーたちは、本当にくだらない。

くだらないことを、くだらなく伝えながら、大騒ぎして、大騒ぎして、そして笑っている。ぼくがまぶたをぎゅっと締めているうちに、いつしか世界は、大笑いしている。

言葉なんか、誰も使っちゃいない。

平気なんだ。伝わるんだ。ケツメドボンバーに守られているから、世界はいつでも大笑いしてられるんだ。

その時、誰かがぼくの肩をたたいた。

「キミ、一人かい、こんな時間に何をしているんだね」

制服姿の警官だった。

「あ、いや、え、へへ…」

「家は近所なのかい？ 誰かを待っているのかな？」

矢継ぎ早に聞いてくるその言葉も、なんだかケツメドボンバー語に聞こえたので、ぼくは吹き出しそうになった。

そんなぼくの顔を見て、警官は質問メドレーをストップさせた。

「何がおかしいの」

「あ、すいません。家はですね、歩いて十分くらいです。大丈夫。

一人で帰れますから」

「そ、そう」

一瞬無然とした顔つきになった警官も、ぼくがそう言ったら、少し表情をゆるめた。

「いや最近キミくらいの子の家出が増えてるから、ちょっと心配になっちゃって。何でもそういう子は手荷物一つで簡単に飛び出してきちゃうらしいんだ」

そう言っただけで警官は、ぼくが持っている紙袋をチラッと見た。

ぼくはそれをわざと振りかざしながら言った。

「おまわりさん、これはドーナツですよ。さつき知り合いのおばさんからもらったので、これから帰って父と食べるんです」

警官は、それ以上何も聞こうとしなかった。

「そうか。じゃあもう遅いから、急いで帰りな。お父さんによろしくな」

「はい。さよなら」

本当は「さよなら、ケツメドボンバー」と言ってやりたかった。

それくらいぼくは、いや、ぼくも、いつしかケツメドボンバーな気分になっていた。

父ちゃんが頭を下げた相手

ぼくは次の日も、学校から帰るとランドセルを置いて真っ先に駅前へ向かった。

そして売店と宝くじ売り場の間にちよこんと座り、目を閉じた。秋はなんとなくエレガントなおいが漂いそうな季節だが、人々の会話は今日もくだならさのオンパレードだった。

全く、エレガントのEの字もない。

くだらなさを実感する。そうか、こういうことだったのか。

夏目雪彦という不良じじいの言ったことが、ぼくは少しだけ分かったような気がした。

昨日ぼくの肩をたたいた警官は、ぼくが一番苦手とするタイプだった。胸を張り、目を見ながら自信たっぷりに話しかけてくる…。そうされただけでぼくの言葉はいつも、ニヤニヤの枝にせき止められてしまう。はい、ビーバーさん、おうちが完成しましたよ。

だからぼくのどの奥には、今まで何匹ものビーバーが住みついてきた。

でもそれが昨日、ケツメドボンバーたちの手によって、ちよつとだけ壊された。言いたいことが、ぼくの口からちゃんと出てきた。

言葉と一緒に、ぼくはビーバーを吐き出すことができたんだ。

って、何が言いたいのかさっぱり分からないと思うが、要するにぼくは、少しだけ安心したのだ。

いいんだよ。いいじゃない。重く考えるなよ。大笑いの世界に加わるためには、枝を集めてちゃダメなんだ。

加わりたいたら、世界に。なりたいたら、ケツメドボンバーに。ほら言っごらん、ケツメドボンバーって。

それが入り口さ。

でもぼくは、入り口が見えただけで、実際のところは何も変わっ

てはいなかった。

その中に入る勇気がどうしても出せないのだ。

教室では相変わらずケンさんにおびえ、ヒロタとは一緒に帰ることもなくなつた。

ニヤニヤがキモいのもう分かつた。じゅうぶん分かつた。だからぼくは、その機会が訪れないように、逃げ回つた。ヒロタのことを呼ばなくて済むように、できるだけ二人から遠ざかつた。

サイテーだ。本当にぼくは、病氣なんだ。不良じじいが言う通り、ぼく自身の存在が、病氣なんだ。

人ごみは、そんなサイテーな気分を少しだけ洗い流してくれた。だからって、人ごみが病気を治してくれるわけじゃない。そんなことくらい、ぼくにだって分かる。ぼくは意外と頭がいいんだ。ところで、存在ってどんなイミだっけ？

駅前で目をつぶるのも今日で三回目だ。

今日はこの間おじいちゃんからもらつたおこづかいを持って出かけ、帰りにあの店でドーナツを二つ買った。

トツピンロールっていう不思議な形をしたドーナツ。なんか、ロツクンロールみたいだな、とぼくは思った。

そう言えば父ちゃん、最近ロツクンロールって言葉を口にしていない気がする。っていうか、最近父ちゃんは、どうやら寝ていない。家に帰ると、また父ちゃんは電話機に向かって頭を下げていた。

なんだか目をはらして、髪の毛もボサボサで、一気に歳をとつた気がする。自慢のモミアゲも手入れをおこたつて伸び放題だ。

でも口調はいつも通りだった。

「もう、校長先生はさすがです。教育者のカガミですよ。わたくしも息子の教育を考える上で、そこらへんは見習いたいと思います」

けっ。何が息子の教育だ。育ててもいないくせに。

「でもね、先生、わたくしも一応は音楽を作る身なんで、だからと言つてはアレなんだけど、歌つてえのはやっぱ、聞く方よりもまず

唄う方が気持ちよくなつてなきやならんと思うわけですよ」

ああああ、床もこんなに散らかしちゃって、足の踏み場もないじやん。この間持っていたのと同じたくさんの紙切れ。なんだか歌詞みたいなのがいっぱい書いてあって、どの紙にも赤いペンで大きくバツテンがしてある。

「そんで、ふと思つたんですわ。うちの息子だったらどんな歌を気持ちよく唄ってくれるだろう、って」

うちの息子だったら？

ちよつと待つてよ。なんでそこにぼくが出てくるわけ？

「…はい？ はあ、小学生相手に考えても始まらない、と。それはその…はい、分かつておりますです。すみませんでした」

ほら、言わんこつちやない。

「そんな、不満だなんて、ぜんぜん…。じゃ、明日の録音、えつと2時からでしたね。はい、はい、分かりました。よろしく願います」

それから父ちゃんは、何度も頭を下げて電話を切った。

「あのさ、高校の校歌なんだから」

「うわあ。だから言ってるだろ、ただいまくらい言えつて」

「言つたさ。父ちゃん、頭下げるのに夢中で気付かなかつたんだよ」

「お、俺がいつ、人に頭なんか下げた」

「下げてない」

「そうだろ」

「父ちゃんが頭を下げた相手は、電話機だ」

「なに、俺、下げた？」

「三十回くらいね。うまくいつてないの？」

「な、何が」

「校歌」

「バカ。いつてるよ。俺は音楽家だぞ。プロをなめるなよ」

「どこがプロなんだか」

「こら。なんだ、親に対してその反抗的な態度は。お前いつからそ

んな不良になったんだ。プロの息子がグレたりしたら…」

「グレたりしたら？」

「それがホントのプログレ、なーんちって」

あれ。気付かなかった。

ここまで意味が分からないギャグを言うほど、父ちゃんが動揺していたとは。そうか。きっとしばらくやっていなかったから、歌が上手に唄えるかどうか心配なんだな。

いいじゃん。どうせ一年でクビになるほどの才能しかなかったわけだし。それに、最終的に唄うのは父ちゃんじゃなくて生徒たちなんだから。

「それより、父ちゃん、ドーナツ買ってきたよ」

「え、本当？ 俺、腹へってたんだあ」

ぼくが紙袋を渡すと、父ちゃんはおわててそれをビリビリ破き始めた。白い粉が当たり前のように落ちて、汚い床をさらに汚した。

コトモだ。

ぼくはため息をついた。

すっごくいけないこと

交差点で信号待ちをしていたら、山のような荷物を積んだりヤカーがぼくの前をゆっくりと通過した。

よいしょ、よいしょ、と言って引っ張っているのは、ヒロタのお母さんだった。

「あっ」

思わずぼくの口から声もれてしまった。

「あら、コクトくんじゃない。こんにちは」

「こ、こんにちは」

その時、それまで目の前の道路を走っていた車たちが、突如としてラクダの大群に変わった。

いつの間にか建物も全て消えて、あたり一面砂だらけ。

生ぬるい風が白い砂を舞い上がらせて、ぼくの目を痛くさせた。

「ふう。こんなにいっぱい仕入れてくるんじゃないかった」

そう言ってヒロタのお母さんはリヤカーを止めて、手ぬぐいで額の汗を拭いた。

「これ全部、本ですか」

「そうよ」

荷台にはシートがかぶせられており、中身は見えない。

そして再びリヤカーを引っ張ろうとして、ヒロタのお母さんは困った顔をした。どうやら砂にタイヤがハマってしまったらしい。仕方なくぼくは、後ろからリヤカーを押しあげた。すると、あっけなくリヤカーは砂から抜け出した。

「いやあコクトくんのおかげで助かったわよ」

「いえ…」

「お礼に本を一冊あげるわね」

そう言っただけのお母さんはシートをめくろうとした。

「そんな、お礼とかは、いいです」

「遠慮しないで。うちはいい本しか仕入れないの。知ってるでしょ」
「ああ、はい…」

ラクダを引いた、アラビアのロレンスみたいな感じの人たちが、何人かでリヤカーを取り囲む。

「うちのお店の奥の棚、見たことある？」

「はい。あ、いや、あの」

「いい本がずらっと並んでるでしょ」

「そう、ですね」

ヒロタのお母さんがシートをばさつとめくる。

ロレンスたちがいつせいに身を乗り出す。

シートの下に高く積まれた本。ピンク色の表紙が見えたところでぼくは顔をそむけた。

「さあコクトくん、一冊あげるから、持って行って」

「あの、やっぱりぼくは、いいです」

と言いながら、本心ではシートの下がたまらなく見たかった。

「そんなこと言わないで。うちのカズヤとも仲良くしてもらってるんだから、おばさんそのお礼もしたいのよ」

「あ、はあ。でも…」

「仲良くしてないの？」

「いや、そうじゃないけど」

「ひょっとして、カズヤのやつにいじめられてるとか？」

「そっ、そんなことはありません」

「そうよね、カズヤとコクトくんは、保育園からのお友達だもんね」

ほら、どれでもいいから好きなの一冊選んで」

おおお、とロレンスたちがのどを鳴らしてシートの下をのぞいている。

「だ、だめだよ、おばさん、ぼくやっぱり…」

「なに言ってるんだ、本当は見えてえくせに」

ロレンスの一人はよく見るとケンさんだった。

「ケンさん!」

「バレバレなんだよ。サルトだって、ホントはアイツんち、エロタ書店だと思ってるんだろ」

そう言ってるケンさんはシートの下から本を一冊抜き出してそれを広げ、ぼくの顔に押しつけた。

「ほら、ほら、見るよ、エロいぞ」

「うわ、うぐ、う…」

目が覚めた。

なぜかぼくの顔面には、下にあるはずの枕が乗っていた。

「あれ、お前今日学校は？」

パジャマ姿のまま二階から降りてきたぼくを、父ちゃんは不思議そうにながめた。

「言ったじゃん。開校記念日で休みだ、って」

「そうだったけ」

「ちつ。ぼくの話なんも聞いてないんだから、父ちゃんは」

「何だよ。今朝はやけに寝起きが悪いなあ。いやな夢でも見たか」

「え？」

ドキッとした。

「そんなんじゃないよ」

「うそつけ。教えるよ、どんな夢見たんだ」

「絶対いや」

「何だよお。コクちゃんのケチンボ。略してコクちゃんチンボ！」

「略してって言わないから、それ。っーか、どしたの父ちゃん」

「何が」

「今朝はめちゃくちや機嫌がいいじゃん」

「あらそーかしら」

「気持ちワリイ」

「お前にだけは言われたくねえよ」

「ぼくだって父ちゃんにだけは言われたくない」

チン、という音が響いた。

オーブンレンジからトーストを取り出して、父ちゃんは皿に並べた。ぼくは麦茶とコーヒーをコップにそそいだ。朝食は、父ちゃんが食べ物係でぼくが飲み物係、と決まっているのだ。

「ところでさあ、コクちゃんチンポ」

「だからそう呼ばれて返事するやついると思うっ？」

「これ、なんだか分かるか」

父ちゃんは一枚の紙をテーブルの上でばらばらとひるがえした。

なんだか難しい漢字がいっぱい書いてある。

なんとか作料、振込先、口座番号…。

「うひよひよひよ、ギャラだ。ギャラが入るのだ」

その用紙が入っていた茶封筒には、ラベルも何も貼られていない一枚のCDが一緒に入っていた。

「これ、例の校歌？」

「そうとも」

「へえ、すげえじゃん。やっと完成したんだ」

「おう。プロの仕事なんて、ま、こんなモンだ」

「へえー。聞こう。かけてよ、早く」

ぼくはついつい声が大きくなってしまった。父ちゃんはいかにもわざとらしく面倒くさそうな表情をして、作業場からCDプレイヤーを持ってきた。

「そんなに聞きたいのなら、聞かせてやる。おどろくなよ」

父ちゃんがどんな意味で言ったのかは知らないが、曲が始まったとたん、ぼくはおどろいた。

なに、これ。

あれ、あれれ、全然違うじゃん。何もかも違う、別の歌じゃん。

「父ちゃん、これ…」

メロディーは、なんか音楽の授業でさんざん唄わされた合唱の曲みたいだし、歌詞はぼくの小学校の校歌に出てくるような変な日本語の連続。

「あの時ぼくが聞いた校歌は？」

「何言つてんだ。それがこの歌だよ」

「うそだあ。違つよ、これ」

「ま、多少変更した箇所もあるが、それはアレだ、校長先生と念入りに打ち合わせを重ねるうちに…」

「多少じゃないじゃん」

ぼくは父ちゃんの言葉をさえぎった。父ちゃんは一瞬顔をしかめてからパンを皿に置き、何も言わずにCDを止めた。

隣の家で食器を洗う音までがはつきりと聞こえてきそうなくらい恥ずかしい静けさが、突然うちのかたむいた台所をおそった。

「父ちゃん、ぼくがこれを唄うの、想像した？」

「なんでお前が唄うんだよ」

「言つてたじゃん。息子が気持ちよく唄える歌にしたい、って」

ぼくが言つと、父ちゃんは深く息をはいてからパンをかじった。

「別に…お前になんか唄つて欲しかねえよ」

「そんな…」

あれ、ぼくの声、おかしい。声から、水がもれてる。

「ぼくは、父ちゃんが作った歌なら…」

あれ、言葉が、日本語が分からなくなっちゃった。えつと、えつと、ぼくが言いたいのは、えつと…。

「父ちゃんの……、うそつき！」
バンツ。

父ちゃんは、ぼくの言葉が終わらないうちにいきなり両手でテーブルをたたいた。歯形がついたパンが宙を舞った。

「あー、うるせえ、うるせえ！」

そしてコーヒークップを持って立ち上がり、中身を思い切り流し台にぶちまけた。ぼくが入れた、父ちゃんの、コーヒー…。

「いいかコクト。父ちゃんはな、大事な仕事をやり遂げたんだ。何度も言つが、これがプロの仕事つてやつなんだ。覚えとけ」

隣の家から聞こえる食器の音に、女の人の鼻歌が乗った。

目の奥がかゆくなったのは、父ちゃんに怒鳴られたからじゃない。

父ちゃんと二人つきりで、母さんのいないこのうちにいるってことが、なんだか突然いけないことのように思えてきたからだ。

おまわりさんに捕まっちゃうくらい、すっごくいけないことのように思えてきたからだ。

すっごく……。

グレまくってやるんだぜ

ふと不安になって、ぼくは足元を見た。

大丈夫。ちゃんと靴ははいている。玄関のドアを閉めた記憶もなければ、もちろん「行ってきます」を言った記憶もないけど、靴は無意識のうちにはいたみたいだ。

こうして駅前で目を閉じていると、全てがどうでもよくなる。

手荷物一つで簡単に家出しちゃうやつの気持ちって、こんなのかな。だとしたらやべーよ。ぼくは手荷物さえも、持っていない。

ふっ、何言ってるんだ。家出なんてする度胸もないくせに。

でも今は、父ちゃんの顔を見たくない。

ぼくは目を開けた。浮かびそうになった父ちゃんの顔を、くだらない景色で抹殺しようとした。

開校記念日とは言っても、世の中的には普通の月曜日の午前中だ。休みの日や夕方の時間に比べて、さすがに働いている人が多い。

ツナギを着て販売機にジュースを補充している人。携帯電話で話している女の人。ティッシュを配っている人。シヨウウインドウのガラスにホースで水をかけて拭いている人。

確かにケツメドボンバーたちは、ここで言葉の身軽さをぼくに教えてくれた。

そんなに重く考えなくていいんだよ。

聞く方だって、重くは考えてないんだから。

分かってるさ。でも、何かが怖くて、言葉が出てこないんだよ。

シヨウウインドウにはね返った水が、枝分かれしてつーっと下に落ちる。そう、あんな感じ。あんな感じで、ぼくが言ったことが枝分かれして、相手を傷付けたり、怒らせたりする何かに結び付いちやうのが怖いんだ。分かってきた。ぼくは、人に怒られたくないんだ。そしてもう、人に去られたくないんだ。

何も言わなければ、ぼくは自分この世界のはしっこにいられる。

誰かが大笑いしている世界のはしっこに。

ぼくは再び目を閉じた。駅前の風景が一瞬にして薄い闇に変わる。

どれくらい目をつぶっていたらう。

不思議とその足音は、改札を出たあたりからずっとぼくの鼓膜に響いていた。だからそれが突然立ち止まって、ちよつと間をおいてから進行方向を変えたのも、ぼくはちゃんと読み取っていた。

足音の主は、ぼくのひざごぞうに触れる寸前で立ち止まり、よつこらしよと言つてしゃがんだ。ぼくは、目を開けた。

「どうだ。調子は」

「あ、不……」

良じじい。つてうわあつ。

ぼくはいきなり現れた不良じじいのかっこうを見てのけぞった。

つるぴか頭に白い手ぬぐいを巻いて、手には草刈り鎌を持っている。ちよつとJRさん、いいんですか、こんな人電車に乗せて。

「しかしお前もマジメと言うか、単純バ力だなあ」

「ば……、またばかつて言った」

「こんなくだらないことをちゃんと実行するとはな」

「なんだよ、これは、じ……」

とそこまで言いかけてぼくはちよつとためらったが、あつたまにきたのもういいや、つて気になり、

「じじいがやれつて言ったんじゃないか！」

と叫んでやった。

「ん？ 今お前、わしのことを何と呼んだ」

「じじい」

「何だと。もういっぺん言ってみろ」

「じじいじじいじじいじじいじじいこの不良じじい！」

「……いっぺんつて言ったのに」

「だまれ。ああ、くだらないよ。こんなこと、くだなくてやってらんないよ。つーか、じじいはそれよっか、もつとくだらないよ！」

ぼくは、はあはあと息をしながらじじいをにらみつけた。

よしっ、と言いながらぼくの中でもうひとりのぼくがガッツポーズを見せた。ぼくは、いや、オイラは、もうグレてやる、だからガッツ！ 不良だぜ、ガッツ！ こうして普通の少年は、不良少年に変身するのだ、親に捨てゼリフをはき、家を飛び出して、盗んだバイクで走り出してはいないけど、駅前で鎌を持った老人をたたきめして、ガッツ！ グレてやるんだぜ、ガッツ！ なんでガッツなのかは分らないけど、とにかくグレて、グレて、グレまくって、プログレになつてやるんだぜ、ガッツ！

ぼくは鏡が見たい、と思った。

今のぼくの顔は、絶対キモくないはずだ。自信ある。

じじいはそんなオイラの雄姿におそれをなしたのか、しばらくだまつた後でこう言った。

「ほう。なんだかんだ言つて、もう二段階目もクリアしておつたか」

「二段階目？」

「わしがお前にワザとして実感させたかった、くだらなさの過程だ」

オイラは意味が分からなかったので、とりあえずウンコ座りしたままタバコに火をつけた。うそ。そういう真似をした。ガッツ！

「この世界をつなげているのは、人間どものくだらない言葉のやりとりだ、と分かるまでが一段階目。で、そんなのが分かったところでどうにもなるモンじゃない、とを感じるまでが二段階目」

「なにそれ。じゃ、まるでぼくはバカみたいじゃないか」

「だからバカと言っただろう」

「このくそじじい！」

オイラは、じじいの胸倉をつかんでパンチとキックを百回くらいお見舞いして、最後に顔をアスファルトにたたきつけてやった。うそ。それくらいの勢いでにらみつけてやった。

なのにじじいいたら飄々と立ち上がり、こう言いやがった。

「大事なのは、三段階目だ。よし、わしについてこい」

「ちょ、ちょっと待ってよ。どこに行くんだよ」

ぼくも立ち上がったって、じじいの後を追った。

「ねえ、ぼく知らない人に付いて行ったらだめだって、学校でも……」
「お前はわしの名前も電話番号も知ってるだろうが」

「そりゃ、知ってるけど」

じじいはいきなり停車中のタクシーに向かって手を上げた。その手の先に鎌を持っているモンだから、運転手はハンドルを握りながら一瞬身構えた。でもぼくの姿を見て恐る恐るドアを開けてくれた。それに、人生ってのはなにことも三段階目が大事なんだ。なぜだか分かるか」

え？ うーん、なぜだ。

「…分かんないよ。どうして？」

言いながら、じじいが乗り込んだ後部座席にぼくも乗り込んだ。するとじじいは、ぼくの目をじつと見た後で、こう言った。

「うわ、このシート、ふかふかだなあ」ガクツ。

「答えは！」

「ご乗車ありがとうございます」と運転手。

あんたも礼なんかいいから。ってゆーか何そのカマ口調。

「ねえ、なんで三段階目が大事なのさ」気になるだろツ。

「おじさま、どちらまでえ？」だからあんたはキモいよ。

「なずな台学園」

「ぼくは無視かよ！ ……って、えええーっ？」

「分わかりましたあ」

ふかふかな感触のまま、車は魔法のように駅前から滑り出した。

「なんだ、知ってるのか、なずな台学園」

じじいはやっとぼくの方を向いて言った。

「知ってるも何も、その学校の校歌、父ちゃんが作った」

そう言ったとたん、じじいは手ぬぐいに半分隠れた眉間にしわをよせた。

「父ちゃん、って、お前の父親か」

「うん」

「そう言や、わし、お前の名前を聞いておらんかったな」

「刻人。佐藤刻人」

「…」

「どうかした？」

「親父の名前は」

「佐藤大介」

「サトウ、ダイスケ…？」

じじいの眉間のしわが、倍の本数になった。

窓の外を流れる町の風景まで、なんだかふかふかしているように見えた。

すげえ女だった母さん

「三段階目についてだが」

走る車の中でじじいはそう切り出した。

「どうやら心配なさそうだな」

「え、どういふこと」

月曜の昼前だけあって、それなりに道は混んでいた。だけどこのタクシー運転手、おもしろいようにうまく車と車の間をすり抜ける。なかなかの運転技術だ。でもその都度小声で「いやあ」とか「きやあ」とか声をもらすのはやめてほしい。

「親父の血がお前にちゃんとかよっている限り、大丈夫だ」

「じじい、うちの父ちゃん、知ってるの？」

「ああ、ちよつとな…。つっても、お前が生まれる前の話だ」

「へえ」

「若い頃のお前の親父は、ありや立派だった」

「モミアゲが？」

「そう」

「そうなのかよ!」

「なに、ひよつとして、今でもあのままなのか、モミアゲ」

「どのままなのかは知らないけど、もう少しで館山が鼻毛だよ」

「よく分からんが、そうかそうか。今でも、ほっほっほ、そうか」
じじいはそう言っつて気色悪い声で笑いながら、窓の外に目をやった。

「ところでお前、親父のこと好きか」

「えっ？」

いきなり好きか、って聞かれても、うーん、はっきり言ってビミョーだし、なんて答えようか。参ったな、うーん、到着するまでに答えないと…。

「はい、着きましたあ」

「近づ」

ぼくは料金を払っているじじいに向かって小さくつぶやいた。

「嫌いじゃないけど、ついていけない」

「ふむ。分かる気はする」

答えを聞いたじじいは、なんだかうれしそうだった。

なずな台学園高校は、県営団地と水路にはさまれた広大な敷地の中にあつた。意外とうちの近くだ。

ぴかぴかの校門は虹のようなアーチ型になっており、校舎へ通じるスロープの両側には、中途半端に植栽された花壇が続いている。

作業服を着た人が電線管の束を肩から下げて校舎から出てきた。

ぼくはその人から無意識に顔をそらしていた。土器を盗もうとして追いかけられた時のことを思い出してしまったのだ。そうだよ。

こういう作業現場に勝手に入ると、こっぴどく怒られるんだぜ。じじい、分かつてんのかよ。

作業服の人はぼくらを見つけると、足早に近寄ってきた。ほらあ。「お疲れさまです!」

言ったのはじじいでも、もちろんぼくでもない。作業服の人はそう言っただけに深く頭を下げた。

「じくろつさん」

じじいが言った。なんだよ、そういうことか。

「じじい、高校の先生だったのか」

ぼくが言うと、じじいは鼻で笑ってから手ぬぐいを結び直した。

「わしがそんなガクのある人間に見えるか」

「見えない」

そして何やら気合を入れてから、じじいは持っていた鎌で花壇のまわりに生えた草を刈り始めた。

「じゃあ、用務員のおじさんか何か?」

「んー、ま、そんなトコだ」

なんだ。確かにこうしてみるとその風貌は、まさに用務員だ。

そんなことより…

「ねえ、じじいは父ちゃんはどういう知り合いなの」

「だから言っただろ。ずいぶん昔に、ちょっとな……」

「昔って、もしかして父ちゃんがバンドやってた頃？」

「そうだ」

「へえ」

そんな貴重な人間だったとは。だって父ちゃんが音楽やってたなんて知ってる人、いや、覚えてる人、この世に何人もいないはずだ。「お前の親父はとんでもないやつだった」

「今でも、そうだけだ」

そうなんだけど、でも、なんつーか、他人に言われるとむかつく。

「音楽家としての才能はゼロだ」

「知ってる。だから一年でクビになった」

「でもな、ロックンローラーとしての才能は、おそらく日本一だ」

「え、どういうこと」

「和製プレスリーと言われつつも一年でクビになったのはな、売れなかったからじゃない。事務所がクビにせざるをえない理由があったからなんだ」

「ぶれ……？」

って誰だよ。

「当時の若いバンドのやつらは、デビューするとすぐにカッコいい服をあてがわれて、テレビで唄わされた。レコード会社が欲しいのはバンドじゃない。バンドのファンというファクションに身を投じる女どもの財布の中身なんだ。疲れた。代われ」

なんだかちよつと難しい話になってきたので、ぼくは分かったよ
うな分からないような返事をしようと思っていたら、え？ え？

じじい、いつしか鎌をぼくに持たせて花壇に座り込んでいやがる。

「な、なんでぼくが草刈りなんかしなきゃなんないんだよ」

じじいは答えずに手ぬぐいで汗を拭き、なんとウンコ座りでタバコに火をつけた。

きえー、この不良務員！ この高校もおしまいだ。

「金儲けをたくらむやつは、みんなしてエサをまかせるんだ」

そう言っただじじいはポツケから花の種らしき粒を出して、乱暴にまき始めた。

「エサ？」

「そうだ。意味もなく、愛だの恋だの夢だのって歌詞を唄わせておきゃあ、バカどもはだまつても食いついてくるからな」

「へ、へえ」

ぼくはそういう歌詞の歌、好きだけど…。

「でもお前の親父は、いくら言ってもそういう歌を唄わなかった」「作る才能がなかっただけだよ」

「そうかも知れんな。面白くもないてめえの生い立ちとか、町歩いててむかついたことなどをだらだら歌詞にして唄ってたよ」

うちに一枚だけあるスネークスのCDには、確かにそんな歌ばかりが収められていたような気がする。

「で、ある日、事務所の社長がお前の親父を呼び出して、ちつとは“愛”が唄えるってトコを見せてみい、と怒鳴ったそうだ」

「ムリだよ、父ちゃんには」

「その通り。愛を唄うなんて無理な話だった。でもその代わりに、お前の親父は“愛”そのものを見せやがった」

「なにそれ」

「社長室の机の上に、バン、と広げたんだよ。一枚の紙切れを」

「紙切れ？」

「婚姻届だ」

「コン…」

「さっきも言った通り、音楽業界の最大の力モは、女どもの財布だ。でも、お目当てとするバンドのボーカルが結婚してるとなったら、やつらは食いつきもしねえ。偶像にもなんねえってわけだ」

…。ぼくは、とりあえず草を刈った。

「お前に言っても分かんねえか」

「わ、分かるよ。バカにすんな」

「じゃあ、偶像ってなんだ」

「それはその、たとえばにぎった拳の銅像、とか…じゃなかったら、そう、ガッツポーズをした人の…」

「もういい」

ガッツ！

そしてぼくはだまって草を刈る。

ってこれじゃぼくが用務員じゃん！

「事務所の社長は説得にかかった。結婚だけはやめてくれ、ってな。それで最後は、結婚なんかしたら、この業界にはいられなくさせてやる、なんておどしみてえなことを言い出した」

「みたいじゃなくて、おどしだよ、それ」

「そういうのは分かるんだな。お前ひよっとしていじめられっ子？」

「ま、まさかあ」

と言いながら、ふいにその社長の顔がケンさんの顔とダブった。

「まあ、あの業界じゃこういった話はずきものだ。そんでたいていは事務所がもみ消すか、あるいは結婚のことをひた隠しにして、ほとぼりが冷めた頃に発表する、ってケースがほとんどだ」

「へえ、そうなんだ」

「でも、お前の親父にはそんなの通用しなかった」

「だろうね」

「こんなバカなことを言う事務所に俺の歌が分かってたまるか！」

「うわ、父ちゃん言いそう」

「ロックンロールを唄いたいんじゃないわ、ロックンロールになりたいのよ、この人は！」

「なんでいきなりカマ口調になるの。って言うか、この人？ 誰、誰が登場したの」

じじいはタバコをレンガのへりでもみ消して、静かに言った。

「お前の、母親だ」

母親、って、母さん…？

「ほとぼりが冷めるまで耐えるどころか、事務所に乗り込んできや

「がった。すげえ女だ」

鎌を持つ手が震えた。なんだか白昼の殺人鬼になったみたい。

「お前の両親みてえに、偉そうなことを言う大人に対して真っ向から勝負を挑む、つてのが三段階目だ」

「なんだかすごい話のもどり方だ。」

「でも、ぼくはまだその三段階目は……」

「クリアした」

「え？」

「わしに向かってじじい、と言うなんざ、たいした度胸だ」

「そんな、だってあんたはホントにくだらないう務員の見習い……」

「ああ、り、理事長、いらしてたんですか！」

「うわっ、突然のでかい声、うわっ、校舎の二階の窓から背広姿の偉そうな人が二名、こっち見て、頭下げて、り、理事長？」

「おう、校長に教頭。おそろいで元気そうだな」

「理事長？　じじ長？　ぼくは、何がなんだか分からなくなって、もう、もう、ひたすら草を刈るしかないわけで、えっと、えっと。」

「あの、そちらのお子さんは？」

「なんだか気味悪いくらい、恐る恐る校長がぼくを指して言った。」

「ああ、こいつは用務員の見習いだ」

「こんにちは、用務員の見習いです。いやあ、草刈はしんどいなあ。つておい！」

塗られたばかりのペンキのにおいが鼻をつく。

理事長室、のプレートがかかったこの部屋は、黄緑色に統一された廊下の壁とは違って、濃い木目調のシックな内装材が使われている。この部屋だけに付いている大きな出窓からは、グラウンドがどーんと見渡せる。一方の壁は、全体が造りつけの棚になっており、端っこには大げさなダイヤルの鍵が付いたでかいロッカーがある。そして天井からぶら下がっているのは、なんとシャンデリアだ。

その部屋の中央に置かれた、タクシーの四百倍くらいふかかしたソファーに座って、ぼくは麦茶を飲んでいた。さつき教頭先生が持ってきてくれたのだ。よく冷えている。ぼくは麦茶を飲みながら、この状況について考えてみた。でもそれは、予想もできなかったことなので、よく分からなかった。ソファーも分かる。シャンデリアも分かる。でもそこに座っているのがぼくだったことが、いまいち分からない。っーかぜんぜん分からない。

ガラガラガラ。扉が開く音。でもこの部屋じゃない。

棚になっていない方の壁は、一部分だけがガラス張りになっており、そこから隣の部屋がのぞける。隣はどうやら職員室のようだ。

じじいとその職員室に入ってきた。

「空調工事は来週中にメドが立つらしいです」

後ろからへこへこしながら、銀縁めがねの校長が入ってきた。手には黒い手帳を持っている。

「あとはエントランスの壁に御影石を張る作業が明日から…」

そんな話はまるで聞かずに、じじいはガラス張りの端にあるドアを開けてこの部屋をのぞきこんだ。

「おう、飲んでるか」

「う、うん」

校長の後ろからさらにへこへこした動きで、小太りの教頭が口を

はさむ。

「理事長。お孫さんを連れて来るなら前もって言ってくださいよ。ベルギーワッフルがたくさんあったんだけど、工事業者の方にさっき全部配っちゃって」

まご？

「だからこいつは孫なんかじゃないって言ってるだろう」

じじいがバカにしたような手振りでぼくの方を指差す。

そうだよ、こんなやつがぼくのじいちゃんなわけないだろ！

「はいはい、用務員の見習いくんですよね」

あー、校長、信じてないな！

じじい、なんとか言えよ。つーか、理事長つて、校長よりも偉いの？ まあこの部屋見たら、なんとなく分かるけど。

「そっこだ！」

校長がいきなり職員室をドタドタと走り出す。

「理事長、すいません、ちょっとこちらへ。あれ、教頭先生、コンポのリモコンは」

「あ、そうか、まず理事長に聞いてもらわないと。えっと、リモコンは確か…あつ、すいません校長、私のポツケに入っていました」

「なんでそんなトコに！」

「なんだなんだ、どうしたと言っただ」

じじいは二人のやりとりに半分あきれた表情でそう言うと、ぼくに「ま、ゆっくりしていけ」と言っって後ろ手にドアを閉めた。

職員室と理事長室は、再び一枚のガラスに隔たれた。

ポリウムが小さくなりはしたが、校長と教頭のカン高い声は相変わらずこっちの部屋にまでもれていた。

「できたんですよ。我が校の校歌が」

だからぼくにもその言葉は聞こえていた。

「そうです。一般募集したら、一件だけ応募があったって言ったでしょう」

一件だけ？ だはは、そういうことだったのねん。

職員室の隅にあるミニコンポの電源を入れながら教頭が言う。

「まあ最初はどうにも使えそうにない歌だったんで断ったんですが、作った本人がどうしてもやらせてくれって泣きついてきたモンで」

「そうそう。それがまたミョーな男でしてね。モミアゲだけは立派なんです、音楽的な知識がほとんどゼロに近くて」

「だからちよつと大変な作業でした」

「ほう。そりゃごくろうさん」

ため息に声を乗せたような口調でそうつぶやきながら、じじいは近くにあるイスに腰掛けた。

ホントだよ。ごくろうさんだよ。

ふんつ。悪かったな、ゼロで。くそう。

見るとじじいも、さすがに反論もできやしないって顔をしている。

「ま、でもそれから私と教頭とで、何度も手直しを要請して、やっと理事長の耳に聞かせられるところまでもっていきましたわ」

えっへん、とでも言いたげな顔の校長。そして、まるで自分たちの手柄を見せつけるかのように、教頭が一枚のCDを出してコンポにセットした。今朝、ぼくのうちにあったものと同じく、何のラベルも貼られていないやつ。

「さあ、いきますよ。あ、ちなみにこれはまだ仮のCDなんで、とりあえず作った本人が唄っております」

「相当オンチですが、気にしないでください」

校長は笑いをこらえるような仕草を見せてから、リモコンのボタンに指を乗せた。その時。

ガラガラガラガラガラ…

「待ってくれ！」

…ラガラガラびしゃーん！

その声は、扉が開く音をまっふたつに引き裂いて、職員室になだれ込んだ。

その声は、それ以外の音を全て遮断させた。

その声は、ピカピカの校舎全体をゆるがせた。

その声は、しなるように生々しく、ぼくの耳をつんざいた。

このガラスの内側からは、職員室の入り口が見えない。

見えないけど、その声には、恥ずかしいくらい聞き覚えがある。

父ちゃんは一枚の紙切れをひるがえしながら、バタバタと職員室になだれこんだ。

まさか婚姻届じゃ…。

「さ、佐藤さん、どうしました」

プール開きの日に降ってきた雨を見るような顔で、教頭が父ちゃんを見る。

「あの俺、これ、やっぱり受け取れないっす」

あ、あの紙、父ちゃんのギヤラの振込用紙。

「受け取れない？ どういうことかね」

校長があごを突き出してメガネの位置を直す。

「まさか謝礼金が少ないなんて言い出すんじゃないでしょうね」

校長の背中越しからなめになったデブ教頭が顔と口を出す。

「違います。金額はその、想像してたより多いんで、正直びびってるくらいなんです」

「じゃあ、何が不満だと言っんだ」

「全部です。この歌、全部が不満です」

「何をいまさら言ってる。君だって録音の時は満足そうに唄ってたじゃないか」

「言えなかつたんです」

理事長室のガラスに張り付いて、ぼくはその父ちゃんの言葉を耳に貼り付けることしかできなかった。脳までとどかない。だって、だって、父ちゃんが何かを言えなかつたなんて、信じられない。

「何度も言おうとしたんだけど、言えなかつたんです」

これには校長も、なんかポケットの中にフライドポテトを一本だけ見つけた時みたいな表情になって、だまってしまった。

そんな雰囲気をあわててめぐうように、教頭が口を開いた。

「言えなかつた、とわざわざ言いに来られても、ねえ」

「それだけじゃないっす。あともう一つ大事なこと。俺、この仕事から降ります」

「ええっ？」

「ちよつと待ちたまえ。何も降りることはないだろう」

「そうですよ。あんなにがんばっていたじゃないですか」

「そうだけど…」

ここからは父ちゃんの背中しか見えない。

その背中が、背中全体が、今ゆっくり息をはいたのが分かった。

「でもこの歌はやっぱり、世に出せません」

「だからどうして！」

「俺じゃないから！」

父ちゃんはそう言っつて、振込用紙を机の上に置いた。

「俺が作りたかった校歌は、こんなじゃないから」

その言葉は、父ちゃんの背中から震えながら垂れて、職員室の床にべちよつと落ちた。

校長と教頭は、なんだかとってもいやらしい場所で偶然出会ったかのように、互いの目をそらしてコンポの方を見た。お前、なんか言えよ。そつちこそ、なんか言っつて下さいよ…。

「どんなんだ」

言っつたのは校長でも、教頭でもない。

「あつ、理事長、申し訳ありません」

校長、じじいがいるの、忘れてただろ。

「ちよつと手違いがありました」

そんな苦しまぎれブラザースなんか完全に無視して、じじいは続けた。

「あんたが作りたかった校唄っつて、どんな歌だ」

「どんな、つて…」

父ちゃんがなんだこいつ、という顔でじじいを見る。

父ちゃんはじじいのことを覚えていないようだ。

「唄っつてみてくれ」

「あの、お言葉ですが理事長、この人はただでさえ相当なオンチで、伴奏があつて初めて聞けるっていうか……」

おい教頭、まる聞こえだよ、ぜんぜん内緒話になつてねーよ。

「ボウズ！」

うわっ。いきなり教頭の二百倍くらいのボリュームで、じじいったら、なに叫んでんだよ。しかもボウズ、って、何それ。

ん？ 何、こっち見て。

ボウズ？ ひよっとして、それ、うわ、ぼ、ぼくう？

なぜかぼくはあわてて隠れた。

「そこにでかいロッカーがあるだろう。そんなにある物をこっちに持つて来い！」

え？ え？ ロッカーって、でもこれ、

「ダイヤルナンバーは、69030、ロックの王様、だ！」

そんなこじ付けはどうでもいいけど。

とりあえずぼくは言われた通りにロッカーのダイヤルを回した。扉が開き、中を見てぼくは息をのんだ。

どくろギターを弾く父ちゃん

なんだ、このギター。銀色の金属でできている。

大きさは父ちゃんの持つているアコースティックギターと変わらないくらい。でも、木じゃない。ぼくが、ぼくの顔が、映っている。それにああ、これは、ロックの王様のギターだ。だって…。

「何してる。早く持つてこんか！」

だって、書いてあるもん。ロックの王様、って。ギターの平らなところに。黒マジックで。

ぼくはそれをロッカーから慎重に取り出した。金属だ。重い。

落とさないように、ぶつけないように、右手で抱え、左手でガラスのドアを、あー、父ちゃん…。

「ん？ んん？ コクト…？」

背中ではなく正面を向いた父ちゃんが、言いながら目をこする。

「お前、なんでこんなところにいるんだ」

「心配するな。こいつはわしに付いて来たただけだ」

付いて来たんじゃないかって、連れて来たんだろ。

「あんたの唄いたい歌が、どうしても聞きたいって言ってな」

そんなこと言ってねーよ。

「佐藤さんのお子さんだったんですか」

デブ教頭がハンカチで汗を拭いながらぼくを見る。

仕方がないので、ぼくは小さくうなずいた。

「さ、これで存分に唄えるだろう。チューニングは合ってるはずだ」
そう言っただけは、ぼくが持つてきたギターを父ちゃんに渡した。

父ちゃんは、それを手に取って目を丸くした。

「ド、ドプロギター…」

どくろギター？ なんて不気味な名前なんだ。

父ちゃんがジャラーンと鳴らす。ひゃあ、なんだこの音は。ギタ

ーの音じゃないみたい。って言うか、楽器の音って気がしない。

父ちゃんのジャラーンが、次第にジャラーンじゃなくなって、ジャラジャラジャラジャラ、ジャツカジャツカジャツカジャツカ、になって、ズンズジャツカズンズジャツカズンズジャツカズンズジャツカ、になつた頃には、みんながだまって、工事の音もだまって、校舎全体がだまって、父ちゃんが目をつぶって、ジャツカジャツカジャツカジャツカ、世界がだまって、そして、始まった。父ちゃんが、始まった。あの歌が、ぼくが聞いたかった、あの歌が始まった。

ぼくらはただ走るんじゃない、カッコよく走りたいのさ…。

父ちゃん、カッコいいよ。アホだけど、アホなりにカッコいいよ。どくろギターを弾く父ちゃん、すっげーカッコいいよ。

父ちゃんは、アホで、母さんに怒られてばっかで、だらしなくて、なさけなくて、ぼくよりもコドモで、ぼくは…ぼくは…。

食べるものは、母さんがくれた。

着るものも、母さんがくれた。

起こしてくれるのも母さんで、寝かしつけてくれるのも母さんだった。

ぼくは、父ちゃんなんかいなくても生きていけると思っていた。

でも父ちゃんの校歌を聞いているうちに、降ってきた。

雨のように、いろんな思い出が、チャーシューが、降ってきた。

ラーメン屋さんで、父ちゃんは自分のチャーシューを箸でつまんで、ぼくのラーメンの上に乗せた。

「ほら、こうするとただのラーメンがチャーシューメンになるだろ」
ならないよ、2枚じゃ。でも、ぼくはうれしかった。ぼくのどんぶりと父ちゃんのどんぶりの間に、てんてんとスープがたれてテーブルを汚していた。

運動会を見に来た父ちゃんは、トラックを進行中の鼓笛隊に分け入ってきて、中太鼓をたたきぼくを大声でまくし立てた。

「コクト、お前だけワンテンポーズれてるよ、いいかよく聞け、このリズムだ、タンタタタン、だめだめ、ここ、ここでバスドラとユニゾンでたたかなきゃ、あーんもう、父ちゃんに貸してみ」

陣内先生になだめられてトラックの外に出されると、父ちゃんはしょんぼりした顔でぼくを見ていた。

父ちゃん。なんで父ちゃんは、一から十までアホなの。

父ちゃんのアホは、世界一だよ。だからアホが作る歌は、世界一だよ。

父ちゃんの校歌は、世界一だよ。

ぼく、この校歌を、唄いたいよ。

ジャッカジャッカジャッカジャッカジャーン。終わった。

ぼくの視界のまわりには、なんだかにじんだ額縁が現れていた。

ぱち、ぱち、ぱち。じじいだ。

その後ろで校長と教頭が、下を向いたままくちびるをかんでいる。

ぱち、ぱち、ぱち… え？

校長じゃない。教頭でもない。

はちぱちぱちぱち、ええっ？ いろんな作業服姿の人たちが、ぱ

ちぱちぱちぱち、うわ、何人も、みんなで、にこにこして、ぱちぱ

ちぱち、いつの間に、職員室が、ぱちぱちぱちぱちぱちぱちぱ

ちぱちぱち！

父ちゃん。

本当に言いたいことって、こうやって言えば伝わるんだね。

そしたらみんな、分かってくれるんだね。

大丈夫。しょせん言葉なんて、世界なんて、ケツメドボンバーさ。

いつしかぼくの視界は、全部額縁になっていた。

「校長、早速明日、レコーディングだ！」

やっと拍手するのを止めたじじいが、突然でかい声を張り上げた。

「レ、レコ、って、もしかして、今の…」

「そう。我が校の、校歌のレコーディングだ」

口をばふばふさせたまま、校長と教頭が顔を見合わせている。

それを鼻で笑ってから、じじいは父ちゃんの肩をポンとたたいた。

「相変わらずのロックンロール・スピリットだな。うれしいよ」

父ちゃんは照れ笑いしながら自慢のモミアゲを指でこすった。

「サンキュ。俺には、これしかないから」

出たっ、父ちゃんのキメゼリフ。

じじいが笑う。どうやら校歌の正式決定のようだ。

父ちゃん、プロの仕事、やったじゃん。

「ところであんた、何者？」

父ちゃんは、どくろギターとじじいを交互に見て言った。

「おう、すまんすまん。自己紹介がおくれたな。わしはこういうモ
んだ」

じじいは首からぶらさげたがま口から、一枚の名刺を出した。

「理事長、夏目、ゆ……」

声に出してそこまで読んだ父ちゃんは、なぜかいきなり固まって
しまった。

「な、夏目さん？」

今度はじじいが少し照れた顔をして、ニヤツと笑った。

「久しぶりだな。スネークスのDAISUKE」

どくろギターに窓の外の景色が映っていた。

逃れようのなさそうな、秋の空が映っていた。

ぼくにはそれしかないんだ

逃れようがない。

何からか、つて、それはもちろん…。

「それじゃ5年・6年の男子、スタート位置について！」
マラソン大会で毎年使われているこの河川敷のランニングコースに、陣内先生の声が拡声器を通して響き渡る。

跳躍したり、足首を回したりしながら、橋の下のラインまでぞろぞろと移動するみんな。中にはあらあら、必勝、なんて書かれた鉢巻をしているやつも。

よし。ぼくは唾を飲み込んで、固くこぶしを握った。それを見て陣内先生が感心した表情で大きくうなずいた。

なんか勘違いしてるな、この人。
スタートのおいがみんなの緊張をあおる。ぼくの中でも緊張感が徐々に高まる。激しいくらい、別の意味で。その時、ケンさんがぼくの横にするりとやってきた。

今だ。今しかない。

ケンさんがこっちを見る。分かってんだろうな、という目でぼくをにらむ。隣には小さくなって下を向いているヒロタがいる。

今だ。大丈夫。アホの父ちゃんにだって、やれたんだ。

「ねえ、ケンさん」ぼくは言った。緊張感、ピーク。

ケンさんがあごだけで返事をする。

「わ、悪いけど…」

ニヤニヤするな。カッコよく叫んでそれを伝えるんだ。

「あん？」

うわ、ケンさんの顔、のどを詰まらせた般若みたい。

負けるな。ケツメド…ケツメド…、ケツメドボンバー！

「悪いけどぼく、真剣に走るよ」

「なんだと」

「約束、破つてごめん。でも、ぼくには…」

ぼくには父ちゃん、そして、母さんの血が流れているんだ！

「ぼくには、やっぱ、体育しかないから。それと…」

陣内先生がピストルに火薬をつめる。

「ヒロタのことは、これからもずっと、ヒロタって呼ばせて」

ケンさんの口が般若のまま何かを言いよどむ。

手に持ったピストルを秋の空に高々と上げる陣内先生。

「だって、コクトでもサルトでも、ぼくはちつとも悲しくないけど、

ヒロタ書店は、ヒロタ書店じゃなきゃ悲しむ人がいるから」

言えた！

「位置について」と拡声器から陣内先生の声。

「サルト…」

ケンさんのくちびるが、変な形をしたまま動きを止める。

「よーい」

あれ、どしたのヒロタ。全身の血を抜かれたような顔で、ぼくを
ぼかーんと見つめてからに。

パアアアアーン！

一斉のスタート。後ろの方にいたぼくは一気にダッシュをかけた。

「あつ、てめえちつと待てよ、おいっ、サルト！」

ケンさんの声がぼくの背中に突き刺さる。

「サルトお」

思い出したかのように叫ぶヒロタの声も聞こえた。

いいんだよ、ぼくのことにはサルトって呼んで。

そしてぼくは、歌と一緒に秋の空へ吸い込まれていった。

オー、パツキヤマラドパツキヤマラド…。

歌は、人間を走らせる。

歌は、心を、過ぎ去ったたくさんの時間をつなげて走らせる。

父ちゃんとじじいの時間も、そうして歌でつながった。

「キャロルよりもっと前、グループサウンズというのが流行った頃があっただ」

昨日、帰ってから父ちゃんは作業場でそんなことを話し始めた。

要するにバンドブームが大昔にもあったってことだ。その中でも特に人気があったレザーシャークスってバンドでドラムをたたいていたのが、なんとあの不良じじい、夏目雪彦だった。

それで、そのバンドを売り出して一躍のし上がったのが、後に父ちゃんをクビにした、例の音楽事務所だった。つまり、じじいと父ちゃんは、事務所の先輩後輩の関係だったのだ。

と言っても、父ちゃんが所属していた頃はもう、グループサウンズなんてブームはとくにしておれており、レザーシャークスのメンバーたちもそれぞれの道を歩んでいたそうさ。だから二人が同じ場に居合わせたことは、ほとんどなかったらしい。

「俺、夏目さんとは話したこともなかったけど、レザーシャークスはよく聴いたよ。『走り出したら止まらない』って曲なんか、日本で最初に作られたロックンロールって言われてたんだぜ」

そう言っただけで父ちゃんは懐かしそうにギターを爪弾いた。

走り出したら止まらない。

なんてダサイタイトルだ、とぼくはある意味感心した。

ちなみにじじいは現在でもその事務所の「特別顧問」という肩書きを持っているらしい。

走り出したら止まらない。よし、ダサイけど、ぼくも。

スタートして百メートル。ぼくは一人、また一人、と抜いていった。ぼくのほつぺたが風を作り出しているような気がした。

でも、爽快だったのもつかの間。ぼくは背後から猛然と追っかけている足音を耳にした。

ケンさんだった。

走り出したら止まらなかったはずのぼくの足が、まるでどこかに吸い込まれるように失速する。ケンさんはぼくの隣にぴったり付いて、はあはあと息をしている。ぼくをぶちのめす言葉を探しているのか、ぼくをぶん殴ろうとしているのか、それともただ単にこのペースに付いていくのがしんどいだけなのか、ケンさんはぼくをちら

りとも見ずに走っている。

ケンさんには無理だ。ぼくは思った。

このペースじゃ、ケンさんはもたない。

よし。ぼくは、歌のテンポを上げた。ペースがさらに上がる。

ケンさん、悪いけど、お先に。

……んん、ケンさんが、脱落しない。ぼくの横から、離れない。

うそだあ、ケンさん、どしたの、いつもならもうとっくに脱落しているのに。前を向いたまま、必死の形相で。そんなにぼくを殴りたいの。

ケンさんは一度もぼくを見ずに、ぼくと足をそろえて走っている。さつきから二人で何人抜いただろう。

しつこいな、とぼくは思った。殴りたいのなら早く殴ってくれ。

やがて先頭集団が見えてきた。信じられない。ケンさんとぼくが、このままだとトップグループに入ってしまう。

柳の木が見えてきた。あそこまでがだいたい一キロだ。

あと二キロ。こうなったら、ちよっと予定外だったけど、一気にぼくも先頭集団の仲間入りをするか。

あれ、と思った。あれ、ぼくは今日、一度もケンさんを怖いと思っていない。今日に限って史上最高の怖さをぼくに見せ付けているのに、ぼくは隣を走るケンさんが、なぜかちつとも怖くない。

ぼくはからだを少しだけ前に倒し、スピードを上げる準備をした。ほっぺたが、また新しい風を作った。

その時だ。

柳の木の枝が、風に揺れて、あっ、端っこの、葉っぱのかけから、突き刺さっていた何かコロツと、あっ、危ない！

「ケンさん、よけて！」

ぼくはケンさんの肩を両手で押した。その拍子にバランスを崩した。柳の枝の隙間から転がり落ちてきた空き缶は、ケンさんの後頭部をかすめて、そのままぼくの額を直撃した。気色悪い鈍痛が走った。額にはない。足の小指にだ。そして気が付いたらぼくは、土

手から公道側の斜面を転げ落ちていた。

「サルト！」

ケンさんの声。思い出したように痛み始める小指。痛めていたことを思い出させやがった空き缶。草むらの中で、ぼくの目の前に転がっている。くそう。

「サルト、大丈夫か」

あれ、ケンさん。立っている。あ、その横をみんなが抜いていつてる。だめ。だめだよ。

「ケンさん、ぼくのはいいから、早く行って」

「でも」

「早く！」

ケンさんは、何度も振り返りながら、のろのろと走り出した。くそう。誰だよ。こんな所に空き缶なんか仕込みやがって。

くそう。はつきり付いているぜ。あの時ぼくの靴が蹴った跡。

くそう、くそう、じごくじとくそう。あー、つまんねー、父ちゃんよりもつまんねーギャグ言っちゃったあ。ぼくはもうだめだ。生きていけない。数メートル上の高さに、ぼくのことを抜いていくたくさんの足が見える。もうだめだ。足の小指いてーし。終わりだ。はしれねーし。

ぼくは草むらに仰向けになった。秋の青空が恨めしく思えた。

柳の木を切り倒したいと思った。もう目に見えるもの全てを切り倒したいと思った。土手も、電線も、その下の道路も、道路を歩く変なオヤジも。

「コクト、がんばれ！」

え？ 見るとその変なオヤジ、肩からギターなんか下げてやがる。わあ、父ちゃんだ！

「がんばれ！」

ちっ。相変わらずその言葉しかねーのかよ。

「…と応援してやりたいのは山々なんだが、あいにく俺はこれからレコーディングでな。行かなきゃならん。じゃ」

おいっ！

父ちゃんは息子の太ピンチに目もくれず、くるっと振り返って、手の代わりにギター先のつまみを振った。

なんて父親だ。おまけにこんな言葉を残して。

「すまん。俺にはこれしかないモンで」

くわーっ、ここで言うセリフかあ！

くっそう、切り倒してやる、なぎ倒してやる、与作は木を切る、くっそう。ぼくは立ち上がった。

びりっけつ集団が近づいてくる。コースに戻り、走り出す。

くっそう、ぼくだつて、ぼくだつて…。

「ぼくだつて、これしかないんじゃないかあ！」

声に出して言った。言いたかったのだ。言える。今だったら、駅前で、拡声器を使っても言える。なんで「じゃあ」なのかは分からないが、とにかくそうして、漫画のセリフみたいにして言える。

よっしあ、走るぞあ。

待てえ、ケンさん！

世界中の自動ドア

橋が見えてきた。

ぼくはリズムに合わせて呼吸をしながら、腕を大きく振った。

はっはっはっはっ、パツキヤマラドパツキヤマラドはっはっはっ。

この際、足の痛みは忘れることにした。ぼくは自分のスピードを目と目の間で感じることにだけに神経を集中させた。

風が開く。

ぼくの目の前で、風が自動ドアのように、ウーンと開く。

これだ。この感覚だ。

風はきつと、世界中の自動ドアによって作られているんだ。

橋の手前で土手のランニングコースは枝分かれする。左側に折れると、ゆるやかな傾斜が下の河川敷まで続いている。車が走れる広い道路と合流する所に一人の先生が立っている。折り返し地点だ。

下まで降りたら、今度はその広い道路を逆方向に走る。土手の上に、今まで走ってきたランニングコースが見える。びりっけつ集団が、自転車に乗った陣内先生に後ろからハツパをかけられている。

あら、その中にはヒロタの姿も。あいつ、頭はいいけど運動はだめだもんなあ。

ぼくは快調に飛ばした。

クラーリネットの歌を一回唄うたびに5人は抜かした。

疲れは全く感じない。呼吸の乱れもない。はっはっはっは、空気は朝の冷たさを適度に残している。ぼくの大好きなクラーリネット、パパからもらったクラーリネット。よし、リズムを刻め。大丈夫、ぼくはなんつったってリズムを刻む人だ。

そして残り一キロの地点で、ぼくの視界はとうとうとらえた。

おぼれかけた水牛みたいにあごが上がった状態で、みんなに抜かされていくケンさんの姿を。スタートダッシュのツケが完全にまわっている。あの走り方じゃ、歩き出すのも時間の問題だ。

かわいそうに、ケンさん。やっぱりもたなかつたね。

ぼくのこと殴れずに、つーか恐れられもせずに、ぼくに抜かされていくケンさん。なんとなくバツが悪いから、そーっとすばやく抜かすとするか。

ぼくは道路の端っこを、なるべく音を立てずに加速して、一気にケンさんを抜き去ろうとした。

視界の一番端っこに、水牛ケンさんのかたまりを感じる。

よし、このまま……いてっ。なんだ？ やべっ。

転びそうになった瞬間、よりによってケンさんと目が合ってしまった。

なんだ、なんだ、いてーじゃねーか。なぜ急に痛む？ 足の小指くわっ、ケンさんすごい形相でぼくをにらんでからに。

ぼくはあわてて視線をそらした。早く、早く、あれ、足が、足が、今まで快調に飛ばしてきた足が、足の小指が、痛いよう、ああー、まじすっげーいてえ。

なんで？ ひよっとしてケンさんの怨念？ 見えないパンチ？

ケンさんは水牛でスピードダウン。

ぼくは激痛でスピードダウン。

思いがけず再びケンさんと併走するべく。状況としては、二人でスタートダッシュした時と同じ。ただ違う点が二つある。今は逆にみんながぼくらを抜いていく。そしてあの時は一度もぼくを見なかったケンさんが、うわあ、またにらんでる。本当につらそうな水牛状態のまま、にらみをきかすので、それはそれは恐ろしい悪魔の形相。逃れられなくさせているぼくの足の小指の痛みは、きつとその魔力の仕業だ。

くそう。

せっかく抜いたやつらに一人、また一人と抜かされていく。

くそう、足が、弾まない。唄っても、歌にならない。

ケンさんは、相変わらずしゃべらない。しゃべれる状況じゃない。

ぼくたちは無言のまま、それぞれの苦しみと並んで格闘した。

それでもケンさんは、ぼくよりも前に出ようと必死で腕を振るう。ぼくだって、ケンさんだけには負けるわけにいかない。なんつったって、スタート直前にあんな大見得きっちゃったんだ。ここで負けたら一生言われる。お前は普段ニヤニヤして口ごもっているくせに、たまにでかいことを言ったと思っただけだった、と。

わあ、やだやだ、そんなこと絶対に言われたくない。

ぼくは痛みをこらえながら、夢中で足を高く上げた。はっはっはっは、よし、スピードを、スピードを、上げるぜい。

オー、パツキヤマラドパツキヤマラド、ずわっ、付いてくるよ、ケンさん、ぼくがスピード上げても、付いてきて、わあ抜かした、くそっ、抜き返してやる、あ、また抜かされた、ちくしょう。

てな具合で半分ヤケになったぼくらはヤケクソのペースがどんどん上がり、またもやみんなを抜き始めた。全くなんてレースだ。

二人とも、なんだかもう意識から煙が上がっちゃって、まわりがよく見えない。とにかく、負けてたまるか。その気持ちだけが、ぼくらを走らせた。

そして、見えてきた見えてきた。

意識の煙にかすんだずっと向こうに、ちんけな手製のゲートが見えてきた。

ゴールだ。

あと数百メートルだ。

ケンさんの巨体から繰り出される足音は、ぼくのすぐ脇で風景全体を揺らしている。うっすらと女子どもの声援も聞こえる。

くおー、ぼくは文字通り最後の力を振りしぼった。

汗が流れて首筋を冷やした。

ケンさんは、あらすごい、顔面がしぼる前の雑巾だよ。半そでの体操服が肌とぴったりくっ付いちやって、そしてぼくから離れない。くそ、ダッシュだ、ダッシュするぞ。

近づいてきた、ゴール、の文字、はつきりと見える。

ぼくは歯を食いしばり、必死で腕を振った。

ケンさんも、ぼく以上に必死だった。

とにかく負けてはならぬ、負けてはならぬのじゃあ！

と、その時、なんだ！ そんな、死を覚悟したデットヒートを演じるぼくらの間を、さらに死を覚悟したすんごい表情で走り抜けていく一人の少年。わあ、わあ、うそお。

ヒロタだあ。

それを見てケンさんが思わず口を開いた。

「うっ、くそっ、ヒロタめ！」

…。

え？

「ケンさん、はあ、はあ、今、なんだった？」

「はあ、はあ、ヒロ、タ、はあ、俺も、そう、呼ぶことに、はあ、した、ワリいか」

「いや、悪く、ないけど」

「それと、はあ、俺を、呼ぶ時」

ケンさんはぼくと、ヒロタの背中に向かってこう言った。

「今度から、さん、を付けるな、はあ、はあ」

ヒロタのペースがダウンする。

「言ってみる、サルト」

「ええ？」

「言つて、はあ、はあ、みるー！」

「…はあ、ケン…」ぼくは言った。

「そうだ」

ケンさんは、なんだかうれしそうな表情をしていた。

ぼくもなんだかうれしくなった。足の痛みがすうっと引いていくのが分かった。

「ぼくは、はあ、サルトの、ままなんだね」

「ワリいか」

「ぜんぜん」

「待て」

「え？」

「はあ、はあ、こら待てえ、ヒロタあ！」

「あつ、ちよつとズルいよケンさん。じゃなくて、ケン！」

沿道でクラス的女子たちが、ぼくを不思議そうに見ている。

ケンさんがヒロタの背中を追いかける。

その背中をぼくが追いかける。

ゴールまで数十メートル。

ケンさん、いや、ケンがヒロタをとらえる。

その二人を、ぼくがとらえる。

三人が横に並ぶ。譲らない。三人とも頭の中に同じ言葉。

一步、一步でいいから、リードするんだ…。

はあつ、はあつ、はあつ、はあつ、はあつ、はあつ。

ゴオオオオール！

ぼくとヒロタは、こうして反対側からケンとの約束を果たした。
川の方から照れくさい風が、ぼくらを吹き逃げしていった。

花たちよ！

と、ここまでがぼくのしょうもない小学校時代の話。

ごめんね。 退屈だったでしょ。

さあ、いよいよこれからは、愛とロマンに満ちあふれた中学時代の始まり始まり！

と言うのはうそで、ぼくの中学時代は愛もなければロマンもなく、一分もくれれば十分に語りきれず、うすっぺらい三年間だった。

一点豪華主義。一言で語るなら、そんな言葉が思い浮かぶ。

相変わらず勉強はだめで、ぼくとケンはいつもクラスの落ちこぼれ。ならばとがんばって色気づいてはみたものの、3回コクって全て瞬殺。ロマンも何もあつたもんじゃない。

まあニヤニヤせずにコクれただけでも、ぼくにとっては目覚ましい進歩だ。

そしてもっと飛躍的な伸びを見せたのが、ぼくの身長だった。入学してから一気に伸び始め、一年の終わりにはなんとケンを抜いていた。

ちなみにケンは、タテに伸びればいいものをヨコにはかりからだが伸びて、二年の終わりにはただのみじめなチビデブに成り下がっていた。こんなやつを六年間も「さん」付けて呼んでいたなんて、思い出しただけで笑っちゃう。つーか腹立つ。

同じ頃、ヒロタは進学塾に通いだして、ぼくらが立ち入れない世界に身を投じてしまった。

で、そんなぼくの豪華だった一点って何かと言うと…。

あのね、ぼくは二年の秋に、県で1番の記録を出したんだ。

反復横とびではない。走り高跳びで。

ちよつと話がもどるけど、小学校の卒業式に来賓として中学の先生が一人招かれていた。その先生、聞くところによると陣内先生の大学の後輩で、まゆ毛が一直線につながった、いかにもジャージが

似合いそうな人だった。

「佐藤、ちよつと来い」

式典が終わると陣内先生はぼくを呼んだ。そしてニコニコしながらぼくの両肩を手で押さえてくるつと振り向かせた。目の前には、その中学の先生が立っていた。

「こいつ、頭を使うのはからきしダメだが、全身のバネは半端じゃないものを持っている。もしかしたら十年に一人の逸材かも知れん」陣内先生は、そんな、みもふたもない言葉でぼくを紹介した。

「つか、はつきり言っただけ意味も分からなかった。」

だから、まゆ毛一直線先生の「よし。中学に入ったら俺のところへ来い」なんて衝撃のプロポーズともとれる一言を聞いても、ぼくは何のことだかさっぱり分からなかった。

でも、まあヒマだったので、入学式が終わったその足で訪ねてみると、まゆ毛先生は本当にぼくを待っていた。

陸上部の部室の前で。

後から聞いたならそのまゆ毛先生、走り高跳びでインターハイの出場経験あり。そんなわけで、ここからは血と汗と涙にまみれた感動のスポ根ドラマの始まり始まり！

と言うのももちろんうそで、陸上部に入部したものの、ぼくは何かと理由をつけては練習をサボり、ケンとつるんでワルさばかりしていた。

「お前には体育しかなかったんじゃねーの？」

ケンに言われた時は、さすがにショックだった。

だから大会の直前になって猛練習をしたら、県で1番になっちゃった。なんか、あのセリフは偉大だ。人に言われると、特に効果を発揮する。

三年の秋に、ぼくは担任からスポーツ推薦の話を持ちかけられた。「この高校は陸上にとっても力を入れている。お前だったら先生、推薦文を書いてやってもいいんだぞ」

そう言っただけは、県でも有名な私立高校のパンフレットを見せ

た。

ぼくは、首を振った。

「先生ごめんなさい。実はぼく、三年前から志望校は決めてあったんです」

いきなり、父ちゃんの話をする。

父ちゃんは今、駅前のスーパーマーケットで働いている。野菜や魚を適当にパック詰めして棚に並べる仕事だ。今日は店長に休みをもらって、あそこでギターを弾いている。

いや、あそこじゃなくても、月一回はライブハウスでギターを弾いて唄っている。バンドを組んだのだ。

ぼくも何度か見に行った。三人編成のオヤジバンドだ。しかもその顔ぶれがすごい。

ボーカル・ギター、父ちゃん。

ドラムス、じじい。

そしてベース、なぜかデブ教頭。

じじいから強制的に特訓を受けたデブ教頭は、あの時のケンみたいな雑巾汗をステージでかきまくっていた。かわいそうに。

そのライブハウスの壁には、エルビス・プレスリーって人の写真がいっぱい飾ってあった。ロックンロールの神様なんだって。ぼくにオレンジジュースを持ってきた店長さんが、そう言っていた。

ぼくはその写真の顔を見て、なるほど、思った。

父ちゃんは千葉県になりたいわけじゃなかったんだ。

この人になりたかったんだ。

でもやりすぎちゃうあたりが、父ちゃんらしいと言えば父ちゃんらしい。要するに、マツグしか見えないんだ。

「今日は来てくれてありがとう。それじゃ最後の曲、聴いて下さい。なずな台学園高校・校歌！」

おいおい、いいのかよ、そんな曲勝手にやっちゃって。

でも理事長と、作った本人がやってるんだから、いいのか。

ちなみにあの校歌は、第一回の入学式になんと生で演奏されたらしい。もちろん、父ちゃんが唄って。

最初に聴いた生徒や保護者は、さぞかしびっくりしたことだろう。なんせ、入学した高校の校歌が、ロックンロールだ。

着物姿のお母さん連中は、腰を抜かしかねない。

実際、賛否両論の声が上がったらしいが、理事長はそれをうまくキャッチフレーズにしてこう説いた。

「ただ生きてるだけじゃ、つまらんでしょ。どうせならカッコよく生きて、人生に可憐な花を咲かせたい。そう思いませんか、お母さんたち」

父ちゃんから聞いたのだが、じじいのその言葉に母親たちの表情は一変したそうだ。

さすがだ。おばさんたちは、可憐な花にたいい飢えている。

そして二回目、三回目と入学式で校歌が披露されるたびに、いい話題だけがうまく広がって、今年はついにテレビ中継だ。

カメラが保護者席をゆっくりと映し出す。

着物姿のお母さんたちが、一斉にあごでリズムをとっている。

世代的にも、ロックンロールはジャストミートだったりして。

でもカメラさん、そっちの席に、ぼくの保護者はいないよ。

ぼくの唯一の保護者は…。

ぼくの、父ちゃんは…。

あそこでギター弾いて唄っているんだ。

ぼくたち親子は、確かに普通じゃないかもしれない。

まわりに比べると、ちょっとななめになっているのかもしれない。

でも、この角度が、ぼくたちのマッスグなんだ。

どんな機械で計ろうと、ぼくたちはマッスグに生きているんだ。

カメラがステージに向けられる。

ぼくの父ちゃんに向けられる。

それしかない父ちゃんに向けられる。

もう、怪しまれてもいい。

ぼくはステージの父ちゃんに合わせて、大声で唄った。
唄いたかったんだ。
夢だったんだ。

この学校に入学して、この校歌を唄うことが。

咲くがいい 花たちよ その水分を糧にして
育つがいい 花たちよ かなしい台学園 高等学校で

父ちゃんの後ろで、じじいがスティックをくるくると回した時、
窓の外で桜の花びらが 可憐に舞った。

可憐な花。花たちよ。

これをロックンロールと呼ぶんだぜ。

そうでしょ、母さん！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8532f/>

サルト

2010年10月8日15時30分発行